

法政大學講義録

著者	若槻 禮次郎, 島田 鐵吉, 杉本 貞治郎, 水野 鍊太郎
出版者	法政大學
巻	10
号	特別法
ページ	1-50
発行年	1904-01-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/5509

（明治三十六年十月十二日第三種郵便物認可）
（毎月十四日三日五日八日十一日十五日十八日廿一日廿五日廿八日發行）

明治三十七年一月三日發行

特別法ノ十

法政大學講義録

第貳拾六號

法政大學發行



特別法第十號目次

現行租稅法論	(自二七七至三七六)	法學士 若槻禮次郎
戶籍	法(自二九三至三〇八)	法學士 島田 鐵吉
特許	法(自七七至九七)	法學士 杉本貞治郎
著作權	法(自四一至六〇)	法學博士 水野鍊太郎

雜報 ○區會ノ違法議決ノ匡正○稅務局ノ告發ノ效力○總損金ノ意義

稟告 本議院ハ法政大學議院ト改題シ
自今毎月三日ニ發行ス

090
1903
5-10

ヲ以テ改良地全體ノ地價總額ト爲シ毎筆ノ所得ニ應ジテ之ヲ分配スルヲ點ニ於テ原則ニ對スル特例アルモノナリ
改良地ハ右ニ述フル如ク土地ノ形狀區畫ヲ變更スルモ地租條例其他地租ニ關スル法令ノ定ムル手續ヲ爲スコトヲ要セス且ツ土地ノ改良アリタルニ拘ラズ其地價ノ總額ニ於テハ從前ノ地價ヨリ増加スルコトナキ故ニ改良ヲ施ササル地ニ比スレハ所得ノ割合ニハ其地租輕キヲ常トスルモノナリ故ニ法律上特殊ノ恩典アルモノト謂ハサルヘカラス此恩典ヲ享受スルニハ法律ハ左ノ條件ヲ具備スルコトヲ要ストセリ
(イ) 市町村內ノ土地所有者全部又ハ一部共同シテ其區畫形狀ヲ變更スルカ又ハ同一土地所有者ニシテ地價數筆ノ土地ノ區畫形狀ヲ變更スルコトヲ要ス
明治三十年法律第三十九號ハ土地ノ整理ヲ爲ス者ニ便宜ヲ與アルノ趣旨ヲ以テ制定セラレタルモノナリ土地ノ整理トハ多數ノ所有者カ土地ノ交換分合等ヲ行フカ又ハ同一所有者ト雖モ多數ノ土地ニ付キ其分合變更等ヲ爲スヲ謂フモノナルヲ以テ交換分合變更等カ多數ノ土地ニ付キ行ハルル場合ニアラザレハ同

現行租稅法論 各種ノ租稅 地租 現行地租

法ヲ適用スヘキモノニアラス但如何ナル場合ニ於テ多數ノ土地ニ付キ交換發
合變更等アリキハ事實ノ問題ナルヲ以テ當該官廳ノ認定ニ任スヘキモノトス
(六)土地ノ區畫形狀ノ變更ハ改良ノ目的ニ出ツルコトヲ要ス明治三十年法
律第三十九號ハ土地ノ生産力ヲ増加シ又ハ其生産費ヲ節減セントスルガ如キ
改良ヲ獎勵スルノ趣旨ヲ有スルヲ以テ改良ノ目的ナキ區畫形狀ノ變更ノ場合
ニハ同法ヲ適用スルコトヲ得ス又ハ一國共同ニテ其國畫界ヲ發展スルニ
(七)政府ノ許可ヲ受ケテ土地ノ區畫形狀ヲ變更シタルモノナルコトヲ要ス
土地ノ區畫形狀變更ニシテ明治三十年法律第三十九號ノ定ムル恩典ヲ受ケル
ニハ土地改良ノ爲メ之ヲ整理スル場合ナラサルヘカラス而シテ區畫形狀變更
カ改良ノ目的ニ出ツルヲ將テ法律ノ期スル土地ノ整理ナルキハ事實ノ問題ナ
ルヲ以テ時ニ認定上爭アルコトヲ免レス故ニ法律ハ豫メ政府ノ許可ヲ受ケヘ
キモノト爲シ政府ノ許可シタルモノノミヲ以テ改良ノ目的ヲ有スルモノニシ
テ而シテ土地ノ整理ヲ爲スモノト看ルヘキモノト爲シ以テ他日爭議ヲ生スルノ
餘地ナカラシメタリ而シテ既ニ法律ヲ以テ政府ノ許可ヲ要スル爲メタル以上

ハ苟モ政府ノ許可ヲ受ケテハ事實改良ノ目的ヲ以テ多數ノ土地ノ交換分合
變更等ヲ爲スモ明治三十年法律第三十九號ノ恩典ヲ受ケルコト能ハサルモノ
トス出願ハ所轄稅務管理局長ニ向ヒテ之ヲ爲スモノニシテ出願書ニハ必ス事
業著手ノ時期ヲ記スヘク且ツ設計書現在地圖變更豫定圖ヲ作リ之ヲ添附セザ
ルヘカラス若シ改良ヲ施行セントスル範圍内ニ官有地又ハ民有第二種地即チ
免租地アリテ其拂下又ハ下渡若クハ供用變更ニ付キ官廳ノ許可ヲ要スルコトキ
ハ豫メ主管官廳ノ許可ヲ受ケ其許可書ヲモ添附セサルヘカラス明治三十年大
藏省令第十九條第一項(一)ニ依リテハ其許可書ヲ添附セザルモノハ其改良ノ
以上述フル所ハ改良地ニ關スル特例ノ普通ナルモノナリ改良施行地ニシテ單
純ナル場合換言スレバ改良施行地内ニ事業著手前ノ事由ニ因リ地價ノ設定條
正又ハ復舊ヲ爲スヲ要スル土地ナキ場合ニ於テハ常ニ以上ニ述ヘタル特例ヲ
見ルヘキモノナリ若シ改良施行地内ニ事業著手前ニ於テ地目變換地類變換開
墾ヲ爲シ未タ其地價ヲ修正セザル土地ヲ包含シ又ハ事業著手前ニ鐵下年期新
開免租年期地價據當年期荒地免租年期若クハ低價年期ノ許可ヲ受ケ其年期前

ホ終了ニ至ラサル土地ヲ包有スルトキハ地價ノ設定修正又ハ復舊ニ付テ地租條例ノ規定スル所ト改良地ニ關シ明治三十年法律第三十九號特ニ規定セタル所トハ如何ニ之ヲ調和スヘキモノナルヤ事業著手後ニ於テハ改良施行地内ニ於ケル土地ノ分割ハ全ク一變シ其地面ノ狀態モ亦面目ヲ改ムルモノアルハ其力故ニ從前ノ區域ト狀態トニ依リ地價ノ設定又ハ修正ヲ爲サントスルモ之ヲ評價スルニ由ナカルヘシ且ツ事業成功シタルトキハ新區域ニ依リ毎筆相當ニ地價ヲ定ムルヲ以テ特ニ規定アルニアラサレハ之ニ依リテ地租ヲ徵收セサルヘカラス隨テ未タ滿了ニ至ラサル年期ハ之ヲ消滅セシムルカ又ハ新定地價ニ對シテ之ヲ適用スルノ途ヲ開カサルヘカラス明治三十年法律第三十九號ハ其制定ノ當時ニ於テハ此等ノ點ニ關シテ規定ヲ缺如シタリ故ニ明治三十三年ニ至リ法律第六十二號ヲ以テ一項ヲ追加シ之カ不備ヲ補正セラレタリ追加後ノ法律ニ依レハ改良施行地内ニ事業著手前ノ事由ニ因リ地價ノ設定修正又ハ復舊ヲ爲スヲ要スル土地ヲ包含スル場合ニ於テハ左ノ如キ取扱ヲ爲スヘキモノトス

一 地目變換地ラシタホタ地價ヲ修正セザリシモノ地類變換若ハ開墾ヲ爲シタル土地又ハ開墾錄下年期開拓錄下年期地價據置年期ヲ有スル土地ハ事業著手ノ際其他ノ現況ニ依リ地價ヲ修正シ新開免租年期ヲ有スル土地ハ事業著手ノ際其地ノ現況ニ依リ地價ヲ設定スヘキモノトシ明治三十年法律第三十九號第三項第一號地租條例ニ依レハ此ノ如キ土地ハ變換等ノ如キ事由アリタル年ヨリ五年以内六年目若クハ十年目又ハ年期明ノ年ニ於テ其時ノ現況ニ依リ地價ノ修正又ハ設定ヲ爲スヘキモノナリト雖モ改良ヲ施行スル場合ニ於テハ地租條例ノ規定ニ依ラス事業著手ノ際其時ノ現況ニ依リ地價ノ修正又ハ設定ヲ爲スヘキモノナリ而シテ明治三十年大藏省令第十九號ハ此場合ニ於テ土地所有者ヨリ地價ノ修正又ハ設定ニ付キ特ニ申告等ヲ爲スヘキコトヲ定メタルヲ以テ當該官吏ハ土地改良ノ爲メ區畫形狀ノ變更ヲ爲スノ出願ニ對シ許可アリタル場合ニ於テ其改良施行地内ニ右ノ如キ土地アルトキハ自ラ進ミテ地價修正又ハ設定ノ手續ヲ爲ササルヘカラス

二 右ニ依リ地價ヲ修正シタル土地ハ地目又ハ地類變換ヲ爲シタルモノハ變換後六年目開墾ヲ爲シタルモノニシテ錄下年期ノ許可ヲ受ケザリシモノハ開

皇手後十年目錦下年期若クハ地價据置年期ヲ有スルモノハ年期明ニ至リ始
メテ修正地價ニ依リ地租ヲ徵收スヘキモノニシテ其以前ニ於テハ從前地價ニ
依リ地租ヲ徵收スヘキモノトス其地價ヲ設定シタル土地ニ付ラモ亦然リ年期
中ハ地租ヲ徵收セス年期明ノ翌年ヨリ設定地價ニ依リ他租ヲ徵收スヘキモノ
ナリ明治三十年法律第三十九號第三項第二號改良施行地ハ事業著手後ニ於テ
ハ地價ノ修正又ハ設定ヲ爲スコト能ハサルヲ故ニ著手ノ際之カ修正又ハ設定
ヲ爲スコトナリト雖モ著手前ノ事由ニ因リ既ニ一定ノ年間ハ從前ノ地價ニ依
リ地租ヲ徵收シ又ハ全ク之ヲ免スヘキモノト爲リタル土地ニ對シ改良施行ヲ
爲スカ爲メ便宜地價ノ修正又ハ設定ヲ爲シタルノ故ヲ以テ直チニ修正又ハ設
定シタル地價ニ依リ其地租ヲ徵收スルコト爲ストキハ所有者ハ土地ノ改良
ヲ爲スカ爲メ却テ多クノ場合ニ於テハ既得ノ利益ヲ失フコト爲リ土地改良
ヲ獎勵スル所以ノ趣旨ニ適セサルヲ以テ此ノ如キ土地ハ地價ヲ修正又ハ設定
スルモ直チニ之ヲ適用セス地租條例ヲ豫期シタル年限ニ至リテ始メテ之ヲ適
用スヘキモノト爲シタルナリ

三 事業竣工シタルニ依リ毎筆ノ地價ヲ定ムルカ爲メ現地價ノ合計ヲ爲シ場
合ニ於テ地目若クハ地類ノ變換後五年開墾著手後九年ヲ經過セサル土地又ハ
錄下年期地價据置年期ヲ有スル土地ニ付テハ事業著手前又ハ著手ノ際修正シ
タル地價新開免租年期ヲ有スル土地ニ付テハ事業著手ノ際設定シタル地價免
地免租年期又ハ低價年期ヲ有スル土地ニ付テハ原地價ヲ以テ現地價トシ合計
額ノ計算ニ加フヘキモノトス明治三十年法律第三十九號第三項第三號蓋シ竣
功ノ土地ニ付スル地價ハ爾後永遠ニ地租ノ標準タルヘキモノナルヲ以テ土地
ノ最近ノ狀態ニ依リテ定メタル地價又ハ被害前ノ狀態ニ於ケル地價ヲ以テ之
カ計算ノ基礎ト爲スハ明治三十年法律第三十九號ノ精神ヲ失ハズシテ地租條
例ノ大體ノ趣旨ヲ全ウスルモノト謂フコトヲ得ヘシ

四 改良施行地内ニ事業竣工ノ時尙ホ地目若クハ地類ノ變換後五年開墾著手後
九年ヲ經過セサル土地又ハ年期滿了セサル土地アル場合ト雖モ其修正地價設
定地價又ハ原地價ヲ以テ現地價ノ合計額ヲ計算シ之ヲ毎筆ニ分配シテ其地價
ヲ定ムヘキコト右ニ説明スル所ノ如シ而シテ事業竣工ヲ告テ其毎筆ノ地價確

定シタルトキハ之ニ依リテ地租徴収スルハ勿論ニシテ隨テ舊區域ニ對シ變換後五年、開墾着手後九年又ハ年期中ハ從前ノ地價又ハ低減タル地價ニ依リテ地租ヲ徴收シ若クハ全ク地租ヲ徴收セスト爲シタル法律上ノ效力ハ自ラ消滅スヘキモノト謂ハサルヘカラス(明治三十年法律第三十九號第三項第二號但書)然レトモ元來明治三十年法律第三十九號ハ土地改良ヲ獎勵スルノ趣旨ヲ以テ制定セラレタルモノナルヲ以テ所有者ヲシテ土地改良ノ爲メ既得ノ法律上ノ利益ヲ失ハシムルカ如キハ其精神ニ適合セザルモノナリ唯事業成功ノ後ニ至リ尙ホ種種ノ年期又ハ修正地價不適用ノ期間ヲ存セシムルコトハ事實ノ許ナサル所ナルヲ以テ法律ハ其自ラ消滅ニ歸スヘキコトヲ定ムルト同時ニ之カ代償トシテ改良施行地内ノ土地所有者カ得ヘカラシ利益即チ免除セラレヘカリシ地租額又ハ從前ノ地價ニ依ル地租ト修正地價ニ依ル地租トノ差額若干ハ低減地價ニ依ル地租ト原地價ニ依ル地租トノ差額ハ幾年期間毎年之ヲ土地所有者ニ與フルカ爲メ事業關係者ヲシテ其協議ヲ以テ利益ヲ受クヘキ土地並ニ其土地ニ對シテ與フヘキ利益ノ金額ヲ定メ政府ニ申告セシメ其年間ハ其土地ノ地租

額中ヨリ其受クヘキ金額ヲ控除シテ納ムルコトヲ得セシメタリ明治三十年法律第三十九號第三項第四號既ニ年期又ハ修正地價不適用ノ期間ノ消滅ノ爲メ利益ヲ失スル場合ニ於テ之カ代償ヲ與フルヲ可カリトセハ修正地價不適用ノ期間消滅ノ爲メ却テ利益ヲ得ヘキ場合即チ修正地價カ從前ノ地價ヨリ低カリ場合ニ於テハ其差額ハ所有者ヲシテ之ヲ負擔セシメテ可ナルヲ以テ明治三十年法律第三十九號第三項第四號ハ此場合ニ於テハ事業關係者ハ負擔ヲ爲スヘキ土地及其金額ヲ協定シ之ヲ政府ニ申告スヘキモノト爲シタリ而シテ右號レノ場合ニ於テハ事業關係者ハ協議調ハサルトキハ實地ノ情況ヲ案シ政府ニ於テ公平適實ニ之ヲ定ムヘキモノト爲スルヲ要スルハ其趣旨ニ依リテ耕地ノ整理ニ關シテハ明治三十二年法律第八十二號ヲ以テ耕地整理法ヲ定メラレ隨テ整理施行地ニ付テハ地租條例其他地租ニ關スル法令ノ特例ヲ爲スモノアリト雖モ耕地整理法第一條及第二條ハ之ヲ第三十年法律第三十九號第一項及第二項ニ比スルニ其規定ニ細粗ノ別アルノミニシテ其趣旨ハ殆ト同一ニ歸スルモノノ如シ特ニ耕地整理法第十五條ハ整理ヲ施行シタル土地ノ地

三年以前ニ湖ルコトヲ得サルモノトスハ(二)ノ場合ニ於テ其地價ヲ修正スルモ付テハ届出ヲ爲シタル場合ト異ナルコトナシ但シ事實變換ヲ爲シタル年ヨリ六年目以後ニ於テ發覺シタルトキハ發覺ノ時現地目ニ依リ地價ヲ修正シ其年ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徵收スベキコト前條ニ述ベタル如シモ未ダ發覺地人又ハ小作人ニ於テ前掲ノ犯則行爲ヲ爲シタル場合ニ於テ所有者其情ヲ知ラサルトキハ借地人又ハ小作人ニ對シ第二十五條乃至第二十七條ノ制裁ヲ適用スヘキモノトス但シ地租ハ之ヲ所有者ヨリ追徵スルモノトス(地租條例第二八條)所有者其情ヲ知リタルトキハ無論所有者其人ノ犯則トシテ所有者ノミヲ罰シ借地人又ハ小作人ハ之ヲ罰スヘキモノニアラサルコトハ第二十八條ノ規定ノ反面ニ於テ疑ヲ容レサル所ナリト雖モ所有者ニシテ情ヲ知ラサルトキハ之ヲ罰スルコトヲ得ス而シテ若シ此ノ如キ場合ニ於テ何人モ所謂セラルルコトナシトセハ所有者ハ往往犯則ヲ敢行シ偶々發覺シタルトキハ之ヲ借地人又ハ小作人ノ所爲ニ籍口シ制裁ヲ免ルルノ弊ヲ生ゼヘキカ故ニ借地人又ハ小作人ノ所爲ナルコト明カナルトキハ之ヲ處罰スルコトヲ爲シ以テ無制裁ニテ

犯則ヲ敢行スルニ至ルヲ防キタルナリ(八八五八六)
地租條例ニ定メタル刑ハ犯則者自首スルトキハ之ヲ免スルモノナリ但シ此場合ニ於テモ追徵スヘキ地租ハ之ヲ免スルコトナシ地租條例第二九條

第二章 所得稅

第一節 所得稅

我邦ニ於テ始メテ所得稅ヲ施行シタルハ實ニ明治二十年ナリ當時政府ハ北海
道物產稅ノ稍ヤ重キニ過クルヲ實アルヲ見之カ輕減ヲ爲スノ目的ヲ以テ北海
道水產稅則制定ノ議アリ之ニ依リテ國庫ノ收入ヲ減スルコト凡ラ二十五萬餘圓
ニ上ラントスルヲ以テ之ヲ補填スルノ必要アルニ加ヘ一方ニ於テハ漸次國防
計畫ヲ完成スルカ爲メ經費ヲ要スルコト尠カラザルヲナラス一般行政費モ
亦社會ノ進歩ト共ニ漸次其額ヲ増加スルハ免レザルヲ趨勢ナルカ故ニ歳入ヲ
増加シテ時勢ノ急ニ應スルノ必要アリシト雖モ當時國庫ノ重要財源タル地租
ハ其負擔輕カラスシテ更ニ之ヲ増加スルハ餘地ナカリシヲ以テナラス時ノ當局

若ハ其他ノ租稅ニ在リラモ亦其稅率ヲ増加シテ歲入ノ増加ヲ求メシヨリハ寧ロ更ニ新稅目ヲ選ヒテ之ヲ制定シ之ニ依リテ所要ノ金額ヲ得ルヲ以テ政黨ノ得タルモノト爲シ而シテ所得稅ナルモノハ能ク富シ程度ニ應ジテ負擔ノ衡平ヲ得ルモノナルカ故ニ之ヲ以テ選擇スヘキ新稅目ト爲スヲ以テ最モ時宜ニ適スルモノト爲シ明治二十年勅令第五號ヲ以テ所得稅法ヲ制定シ同年七月一日ヨリ之ヲ實施シタリ明治二十年ニ於テハ年ノ央ヨリ勅令ヲ施行シタリシカ當時ノ書額ニ徵スルトキハ同年度ノ收入ト爲ルヘキ所得稅額ヲ六十萬圓ト爲セタルモノノ如クナルヲ以テ見レハ所得稅法制定當時ニ於テハ新稅ニ依リ年ニ凡ソ百二十萬圓ノ收入ヲ得ルトスルニ在リシカ如シ今明治二十年ヨリ同三十一年ニ至ル十二年間ニ於ケル所得稅ノ賦課額ヲ舉クレハ左ノ如シ

明治二十年

五二七、八二四

明治二十一年

一〇六六、八五五

明治二十二年

一〇五六、二五六

明治二十三年

一〇八八、五八六

明治二十四年

一一一〇、七〇〇

明治二十五年

一二九〇、六六六

明治二十六年

一三三八、〇七二

明治二十七年

一三五九、〇五三

明治二十八年

一四九五、九二〇

明治二十九年

一七九六、四九八

明治三十年

二〇九一、八七三

明治三十二年

二二三四、七四五

所得稅法ハ明治二十年制定以來市町村及ヒ府縣制ノ施行セラルルニ至リ之ト一致セシムルカ爲メ特別法令ヲ以テ補則メ如キ規定ヲ設ケタル外何等變改セラレタル所アルコトナシ然ルニ明治二十年制定ノ所得稅法ハ年々輕ルニ隨ヒ左ノ點ニ於テ時勢ニ適應セラルニ至リシハ其ノ實額ニ試ミ其ノ結果ハ納稅義務者ノ範圍明カナラス該法ハ單ニ三百圓以上ノ所得アル人民ハ納稅義務アルコトヲ定ムルノミナルカ故ニ外國ニ在ル本邦人及ヒ外國人

ノ納稅義務ニ付テハ法律ノ意義分明ナラス該法制定ノ當初ニ於テハ内外ノ交通今日ノ如ク頻繁オラザリシノミナラス舊條約ノ下ニ於テ外國人モ對シテハ課稅ヲ爲サザル慣例ナリシカ故ニ此ノ如キ規定モ亦實際ニ於テ甚シキ支障ヲ見サズ得タリト雖モ内外交通隆盛ト爲リ彼我互ニ多數ノ在留人ヲ見ルニ至リ特ニ改正條約ノ實施ト共ニ外國人ト雖モ帝國ノ課稅權ニ服從セザルベカラサルニ至リタル以上ハ國ノ内外ニ涉リテ納稅義務者ノ範圍ヲ明カニスルニアラサレハ法律ノ施行上疑義ト紛爭トヲ殆ト絶ユルコトナカルヘシ

第三十條

第二〇式一八三三

二 法人ニ課稅スルコトヲ得ス 所得稅法制定ノ當時ニ於テハ法人ナル觀念尙未タ一般ニ了得セラレザリシカ故ニ該法ハ法人ニ課稅スルノ規定ヲ設ケザリシト雖モ爾後社會ノ發達ト共ニ商事會社ノ勃興ヲ促シ商法民法ノ實施ニ依リ法人ナルモノ茲ニ法律上ノ承認ヲ得ルニ至リタハ之ニ課稅セサルハ法ノ衡平ヲ維持スル所以ニアラス特ニ法人ニ課稅セサルノ結果ハ箇人ヲシテ依リテ以テ所得稅ノ賦課ヲ免ルルヲ得セシムルニ至ルヲ略レサルヲ以

テ所得稅ニ因リ收入ヲ得ントスルノ目的ヲ達スルカ爲メニモ亦法人ニ課稅スルノ必要ヲ見ルモノナリ

第三十條

二五式四一

三 累進稅ノ目的ヲ達セス 該法ノ規定スル所ニ依レハ所得ハ之ヲ五等ニ分チ累進的稅率ヲ以テ之ニ所得稅ヲ課スヘキモノト爲セリト雖モ既ニ課稅アシテ貴富ノ間ニ權衡ヲ得セシムルカ爲メニハ累進稅ノ方法ニ依ルヲ可ナストセハ僅ニ五等ノ等級ヲ以テシテハ其目的ヲ達スルコトヲ得サルヘシ何トナレハ等級少キトキハ累進ノ效用ヲ奏セサルノミナラス等級間ニ於ケル課率ノ差額多キニ過キ却テ權衡ヲ失フニ至ルヘキヲ以テナリ故ニ累進稅ノ目的ヲ達セントセハ自ラ所得ノ等級ヲ多カラシメサルヘカラス

四 執行機關其宜ヲ得ス 所得稅ノ調査決定ニ付テハ府縣知事郡區長ヲ以テ之ニ當ラシメタリト雖モ稅務執行機關ニシテ既ニ府縣知事ノ手ニ離レテ特定スルコトト爲リタル以上ハ所得稅ニ限リテ獨リ之ヲ府縣知事郡區長ニ委スヘキノ理由アルコトナシ故ニ他ノ租稅ト同シク所得稅ノ調査決定モ亦稅務機關ヲシテ之ヲ行ハシムルコトト爲スヘキハ當然ナリ

右ニ概舉スルカ如キ點ニ於テ所得稅法ハ既ニ其改正ヲ要スルノ時機ニ達シタル際ニ恰モ明治三十二年度ノ歲計ニ於テ巨額ノ歳入不足ヲ見タルカ故ニ茲ニ財源ノ鞏固ヲ圖ルカ爲メ増稅計畫ヲ立ツルノ必要ヲ生シタルヲ以テ明治三十二年法律第七號ヲ以テ所得稅法全部ノ改正ヲ爲シ前記ノ缺點ヲ補フト同時ニ之ヲ以テ歳入増加ノ一財源ヲ充ツルコト爲レリ當時政府ノ計畫ニ於テハ所得稅法ノ改正ニ依リ百四十九萬四千五百十六圓ノ增收ヲ得ルニ在リシカ如シ然ルニ明治三十二年度ニ於テ實際決定又ハ增收シタル所得稅ハ左ノ如シ

種別	稅率別ノ所得人員	其所得金額	所得稅額
第一種(千分ノ二十五)	五八四六	六四二二、一八	一六〇二八一〇
第二種(千分ノ二十)	公債、國債、地方債、株式、公債、國債、地方債、株式、公債、國債、地方債、株式	一、八三八、七五〇、九五六、三〇〇、二二七、九七〇、五〇	二、三六七、七五〇、二五五、九四一、二八、一三五

千分ノ五十	一四	五六六、九八一	二八三四九
千分ノ四十五	六六	一六一、一九二	七、二五〇三
千分ノ四十	九四	一六一、五六一七	六、四六二四
千分ノ三十五	一四二	一六二、五〇三七	五、六八七六
千分ノ三十	四六一	三九二、四六〇六	二、七六〇六七
第三種(千分ノ二十五)	二三四一	一、〇四二、六八四	二、七六〇六七
千分ノ二十	五、一三〇	一、四二、三四一八四	二、八四六八三
千分ノ十七	八七、二六	一六〇、七三四一六	二、七三二四八
千分ノ十五	三五、六七九	三八、一三、四五五	五、七一七〇二
千分ノ十二	九七、四五二	五四、三九七、五五四	六、五二七、七
千分ノ十	一九二、五四五	六〇、九四九、二〇四	六、〇九四九三
合計	三、四二六、五二	二、〇四六、六五五、四二	三、〇三六、一八八
即チ所得稅ノ總額ハ四百八十九萬四千九百三十九圓ヲシテ之ヲ明治三十二年	三四八、四九八	二、一八一、五七四、七〇	四、八九四、九三九

度總豫算ニ掲上シタル所得稅額即チ稅法改正前ノ豫算額二百三十四萬千二百三十九圓ニ比スレハ二百五十五萬三千七百圓ノ増加之ヲ明治三十一年度賦課額二百三十四萬七千九百四十五圓ニ比スレハ二百五十四萬六千九百九十四圓ノ増加ニシテ當初政府ニ於テ豫期シタル増加額百八十九萬餘圓ニ比スレハ凡ソ六十五萬六圓ノ增收ヲ見タルノ結果ナリ明治三十三年度ハ今尙ホ年度未經過ノ中ニ在ルヲ以テ其所得稅額ハ未タ正確ナル計數ヲ得ルニ至ラズト雖モ第三種ノ所得ノミニ就テ見ルモ前年決定額ニ比スレハ大ニ増加シタルモノノ如クナルヲ以テ全部ニ於テハ前年ヨリモ大ニ増加スルモノト謂フテ課金カナルヘシ所得稅ナルモノハ民富ヲ追フテ年年増加スルノ傾向アルモノニシテ而モ所得稅ノ長所ノ一ハ則チ茲ニ在リト謂フコトヲ得ヘキモノナルカ故ニ今後ニ於テモ頗ル有望ナル財源トシテ見ルコトヲ得ヘシ云々

第二節 現行所得稅

現行所得稅ヲ研究セントヒハ左ノ諸法令ヲ參看スルコトヲ要ス

六四六二四
三二五〇三
二八三〇式

- 一 明治三十二年法律第十七號 所得稅法
 - 二 明治三十二年勅令第七十八號 所得稅法施行規則
 - 三 明治三十二年大藏省令第十二號
 - 四 明治三十二年大藏省令第十三號
 - 五 明治三十二年大藏省令第十七號
 - 六 明治三十二年大藏省令第七十六號
 - 七 明治三十三年大藏省令第三十六號
- 予ハ本節ヲ納稅義務者課稅標準課稅率、税金徵收納稅地納稅義務者ノ申告義務及ヒ罰則ノ七款ニ分チテ説明セントス

第一款 納稅義務者

納稅義務者ノ何人ナルヤヲ説明スルニ先チ第一著トシテ所得稅法ノ施行セラルル範圍ヲ明ニセタルヘカラス何トナレハ所得稅法施行地ニ何等ノ關係ナキ者ハ所得稅ヲ納ムル義務ヲ生スヘキ理由ナキヲ以テ納稅義務者ト爲ルニハ所

得稅法施行地ニ於テ何等カノ關係ヲ有スルヲ必要トスヘキヲ以テナリ法律
 〆臺灣ニモ施行セラルヘキ場合ニハ明治三十九年法律第六十三號ノ規定ニ
 本ツキ勅令ヲ以テ其旨ヲ公布セラルヘキモノナリト雖モ所得稅法ニ關シテハ
 之ヲ臺灣ニ施行スルコトヲ定メタル勅令ノ公布セラレタルコト當テ之アルコ
 トナキカ故ニ臺灣ニ於テハ所得稅法ノ施行ナキモノナリ而シテ内地ニ於テモ
 所得稅法第五十條ハ沖繩縣小笠原島及ヒ伊豆七島ニハ當分所得稅法ヲ施行セ
 ラルコトヲ規定スルヲ以テ帝國中臺灣沖繩縣小笠原島及ヒ伊豆七島ハ所得稅
 法ヲ施行セラル地ニシテ臺灣沖繩縣小笠原島及ヒ伊豆七島ヲ除ク外ノ他ノ地
 方ハ總テ同法ヲ施行スルノ地ナリト謂ハサルヘカラス
 所得稅法ハ納稅義務者ノ條件ヲ定メテ人カ同法施行地ニ關係ヲ有スルトキト
 所得カ同法施行地ニ關係ヲ有スルトモトノ二ノ場合ニ於テ納稅義務ノ發生ス
 ヘキモノト爲セタルヲ以テ以下此二ノ場合ヲ區別シ納稅義務發生ノ條件ヲ論
 セントス 第三十二條 勅令第十八號 附屬規則 第五條
 第一 人カ所得稅法施行地ニ關係ヲ有スルニ因リ義務ヲ生スル場合

所得稅法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ同法施行地ニ一箇年以上居所ヲ有シ所得
 者ハ其所得ヲ生スル源泉カ同法施行地ニ關係アルト否トヲ問ハズ所得稅ヲ
 納ムル義務アルモノナリ即チ人カ所得稅法施行地ニ關係ヲ有スルニ因リ義務
 ヲ生スルハ左ノ二條件ヲ具備スル場合ナルコトヲ要ス 第一 所得稅法施行地
 一 所得稅法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一箇年以上居所ヲ有スルコトヲ要ス
 所得稅法ニ依リ納稅義務ヲ生スルニハ同法施行地ニ於テ居住ノ關係ヲ有セザ
 ルヘカラス(所得稅法第一條) 第二 所得稅法施行地ニ住所ヲ有スル者ハ所
 得稅ヲ納ムル義務アルモノナリ所得稅法第一條ハ同法施行地ニ住所ヲ有ス
 ル者ハ納稅義務アルモノトヲ規定スルヲ以テ見住所ヲ定ムルト同時ニ直ニ
 納稅義務ヲ生スルカ如シト雖モ予ハ同法全條ノ精神ニ依リテ解釋シ其年一月一
 日ニ於テ既ニ住所ヲ有セ爾後引續キ之ヲ有スル者ニアラザレバ所得稅ヲ納ム
 ル義務ナリモノナリト信ス蓋シ所得稅ナルモノハ年稅ニシテ一箇年ノ所得ヲ
 標準トシテ之ヲ課スルモノナリ隨テ之カ納稅者タル者ハ一年ヲ通シテ納稅義

務ヲ有スル者ナラサルヘカラス所得税法カ年ノ中途ヨリ義務ノ生シタル場合ニ於ケル所得ノ計算方法ヲ規定セザルヲ以テ見ルモ同法ノ意ハ其定メテ以テ納税義務者ト爲ス所ノ者ハ常ニ一月一日ヨリ其義務アル者ニシテ年ノ中途ヨリ義務ヲ生スヘキ場合ハ之アルコトナシト爲スモノト謂ハサルヘカラス果シテ然ラバ納税義務ノ條件具備スルヤ否ヤハ年ノ初日即チ一月一日ヨリ之ヲ見ルヘキモノト謂ハサルヘカラス一月一日ニ於テ未タ住所ヲ有セサル者ハ法定ノ條件ヲ缺クモノナルヲ以テ之ニ對シテハ所得税ヲ課スルコト能ハサルナリ或ハ非難シテ曰ハン所得税法ノ精神ニシテ納税者ハ一年ヲ通シテ其義務ヲ有スル者ナルコトヲ要ストスルニ在リトモハ同一ノ論法ニ依リ年ノ中途ニ於テ條件ヲ缺如スルニ至リタル場合ニ於テハ納税義務消滅スルモノト爲ササルヘカラス然ルニ同法第四十二條ハ所得金額決定後納税管理人ヲ定メスレテ納税義務者帝國外ニ住所ヲ移ストキハ其際直チニ其所得税ヲ徴收スヘキコトヲ定ム法律カ年ノ中途ニ於テ納税義務ノ條件ヲ缺如ニ至リタルトモニ於テ其年ノ所得税ヲ徴收セザルコトヲ定メサルノミナラス其年ノ所得税ハ必ズ之ヲ徴收

スルコトヲ定ムルヲ以テ見ルモ所得税法ノ精神ハ必ズモ一年ヲ通シテ義務アルコトヲ要スルニ在リタルヲ明ナラヌヤ然レトモ所得税ハ所得ノ豫算額ニ依リテ之ヲ課スルモノニシテ所得金額ノ決定アルトキハ義務ハ既ニ發生シタルモノナリ既ニ發生シタル義務ハ法律ニ於テ之ヲ變更又ハ消滅セシムルノ規定ナキ限リ其成立ヲ存續スル法律ハ納税義務者カ外國ニ住所ヲ移シタル場合ニ於テ其義務ヲ消滅セシムヘキヲ規定スル所ナシ故ニ其所得税ハ之ヲ徴收セザルヲ得ズ是ハ法律ノ規定ヨリ生スル當然ノ結果ナリ況ヤ所得税法第四十二條ノ規定ハ此ノ如キ場合ニ於テ其義務ヲ消滅セシメサルコトヲ明ニスルニ於テヤ該條ノ規定アルヲ以テ年ノ中途ニ於テモ尚ホ納税ノ義務ヲ生スルモノナリ蓋スルノ論據ト爲スコト能ハサルナリ然レトモ苟モ年ノ初日即チ一月一日以來所得税法施行地ニ住所ヲ有スル者ハ其ノ事ニ因リテ條件具備スルヲ以テ其身ハ現ニ外國又ハ同法ヲ施行セサル地ニ寄留シ若クハ旅行スル場合ト雖モ所得税ヲ納ムヘキ義務ハ即チ之ヲ免ルルコトヲ得サルナリ今住所ヲ有スルカ爲メ納税義務アル者ヲ分類シテ列舉スルトキハ凡ソ左ノ如

モフトスル所合算第三種ノ所得ハ三百圓ニ滿テサルトハ所得稅ヲ課スル所
 所得稅法第六條ハ「第三種ノ所得ハ三百圓ニ滿テサルトハ所得稅ヲ課スル所
 云ヘリ該條ノ意義ハ凡ソ個人ニシテ公債社債ノ利子ヲ除ク外ノ所得三百圓以
 上ヲ有スル者ニハ其所得ハ如何ナル種類ナルヲ問ハス所得稅ヲ課シ三百圓ニ
 達セサル者ニハ之ヲ課セスト謂フニ在ルヲ將タ個人ニシテ公債社債ノ利子ヲ
 除ク外ノ所得ニシテ所得稅ヲ課スヘキモノ三百圓以上ヲ有スル者ニハ所得
 稅ヲ課シ三百圓ニ達セサル者ニハ之ヲ課セスト謂フニ在ルヲ予見ル所ヲ以
 テスレハ其意正シシ後者ニ在ルモノナリ何トナレハ法律ニ納稅義務ノ條件ヲ
 定ムルニ其定テ所得稅ヲ課セスト爲シタル所得ヲモ計算中ニ入ルルノ意ア
 リタルモノト爲スコト能ハサザル以テナリ特ニ課稅スルカヲナリ所得ヲ算
 入シテ三百圓以上ニ達スルトキハ納稅義務ヲ生ズルモノト爲テ其結果ハ課稅
 スヘカヲナリ所得ノミヲ有スル者ニシテ其額三百圓以上ニ達スルトキハ納稅
 義務アリト謂フニ歸スルカヲ以テ換當スレハ所得稅ヲ課セザル者モ亦所得
 稅ヲ納ムヘキ義務アルモノナリ所謂「二重ル課稅」ナリ法律ノ意義ニ照シ此ノ

如キハ矛盾ヲ容テシヤ故ニ予ハ同條ヲ解シテ所得稅ヲ課スヘキ所得即チ第五
 條ニ列舉シタル所得ヲ除キテ所得三百圓以上アル場合ニ限リ納稅義務スル
 モノト爲シタルモノナリト信ス（通稱第三種所得第六條）
 第二種所得カ所得稅法施行地ニ關係ヲ有スルニ因リ義務ヲ生ズル場合ニハ該
 所得稅法施行地ニ住所ヲ有セス又或ハ簡年以上居所ヲ有セザル者ト雖モ同法
 施行地ニ於テ所得ヲ有スル者ハ其所得ニ付テハ所得稅ヲ納ムルノ義務アルモ
 ノナリ（所得稅法第二條）元來所得稅ナルモノハ對人的性質ヲ生ズルモノナルカ
 故ニ原則トシテハ所得稅法施行地ニ居住ノ關係ヲ有セザル者ハ納稅義務ヲ有
 スヘキモノナラズ然レトモ同法施行地ニ居住ノ關係ヲ有セザル者ハ現ニ同地
 ニ於テ所得ヲ有スル者ニシテ所得稅ヲ課セラルルコトナシトセハ同一ノ資
 產ヲ有シ又同ノ營業職業ヲ爲スニ拘ラズ居住ノ關係アルト否トニ依リ
 其間ニ課稅上ノ不衡平ヲ生ズルニ至ルハキ力故ニ法律ハ稅制ノ結果ニ因リ生
 存競争ノ上ニ特別ノ保護ヲ受ケルカ如キ者ヲ生セザルヲ期シ所得稅法施行地
 ニ於テ所得ヲ有スル者ハ居住ノ關係ナキ場合ト雖モ之ニ所得稅ヲ課スヘキモ

ノハ爲シテ唯居住ノ關係ナク別對之ニ所得稅ヲ課スル例外ノ事ニ屬スルヲ以テ此場合ニ於テハ納稅義務者ノ全所得ニ課稅スルニテラ其所得中所得稅法施行地ニ於テ生ズルモノミ課稅スヘキモノトス納稅ノ結果ニ因リテ所得カ所得稅法施行地ニ關係ヲ有スルニ因リ納稅義務ヲ生ズルニハ左ノ二條件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 一 所得稅法施行地ニ於テ所得アルコトヲ要ス、同法施行地ニ居住ノ關係ナク又所得ノ關係ヲモ有セザルトキハ所得稅法ヲ施行ト何等ノ關係ナキモノナルカ故ニ義務有無ノ問題ヲ生スヘキモノニアラス故ニ居住ノ關係ナキ者ニシテ納稅義務ヲ生ズルハ獨リ同法施行地ニ於テ所得ヲ有スル場合ニ限ルモノナリ而シテ其所得ト法人ニ在リタハ如何ナル少額ト雖モ之ニ課稅セラレハシト雖モ簡便ニ在リテ三百圓未満之ニ課稅セス三百圓以上ニ達シタルトキ始メテ課稅ヲ受クヘキモノトス(所得稅法第六條)
- 二 其所得ハ資產營業又ハ職業ヨリ生ズルモノナルコトヲ要ス(法律ハ其施行地ニ資產營業又ハ職業ヲ有シ之ニ因リテ生ズル所得ニノミ課稅スヘキ)

トヲ定ムルカ故ニ所得稅法施行地ニ於テ土地家屋ノ如キ資產ヲ有シ之ニ因リテ所得ヲ得ル場合又ハ商工業ノ如キ業務ヲ營ミ若シハ醫師辯護士等ノ如キ職業ヲ爲シ之ニ因リテ所得ヲ取得スル場合ニ限リ其所得ニ課稅スヘキモノナリ所得稅法施行地ニ於テ恩給又ハ年金ヲ受クルカ如キハ同法施行地ニ於テ所得ヲ有スルニハ相違ナシト雖モ其所得ハ資產ヨリ生ズタルニアラス又營業職業ヨリ生ズタルニモアラサルカ故ニ之ニ付テハ納稅ノ義務ナキモノナリ今所得稅法施行地ニ資產營業又ハ職業ヲ有シ所得アルニ因リ納稅義務アルヲ分類列舉スルトキハ凡ソ左ノ如クナルヘシ

- (イ) 帝國臣民ニシテ所得稅法ヲ施行セザル地ニ住所ヲ有シ現ニ其地ニ居所ヲ有スル者
- (ロ) 帝國臣民ニシテ所得稅法ヲ施行セザル地ニ住所ヲ有シ現ニ外國ニ居所ヲ有スル者
- (ハ) 帝國臣民ニシテ所得稅法ヲ施行セザル地ニ住所ヲ有シ現ニ同法施行地ニ居所ヲ有スルモ居所ヲ有シタル後未タ一箇年ニ滿タサル者

- (ニ) 帝國臣民ニシテ外國ニ住所ヲ有シ現ニ外國ニ居所ヲ有スル者
- (ホ) 帝國臣民ニシテ外國ニ住所ヲ有シ現ニ所得稅法ヲ施行セサル地ニ居所ヲ有スル者
- (ヘ) 帝國臣民ニシテ外國ニ住所ヲ有シ現ニ所得稅法施行地ニ居所ヲ有スルモ居所ヲ有シタル後未タ一箇年ニ滿タサル者
- (ト) 外國人ニシテ所得稅法ヲ施行セサル地ニ住所ヲ有シ現ニ其地ニ居所ヲ有スル者
- (チ) 外國人ニシテ所得稅法ヲ施行セサル地ニ住所ヲ有シ現ニ外國ニ居所ヲ有スル者
- (リ) 外國人ニシテ所得稅法ヲ施行セサル地ニ住所ヲ有シ現ニ同法施行地ニ居所ヲ有スルモ居所ヲ有シタル後未タ一箇年ニ滿タサル者
- (ヌ) 外國人ニシテ外國ニ住所ヲ有シ現ニ外國ニ居所ヲ有スル者
- (ル) 外國人ニシテ外國ニ住所ヲ有シ現ニ所得稅法ヲ施行セサル地ニ居所ヲ有スル者

(ヲ) 外國人ニシテ外國ニ住所ヲ有シ現ニ所得稅法施行地ニ居所ヲ有スルモ居所ヲ有シタル後未タ一箇年ニ滿タサル者

(ソ) 帝國法人ニシテ所得稅法ヲ施行セサル地ニ本店ヲ有スル者

(カ) 帝國法人ニシテ外國ニ本店ヲ有スル者

(ヨ) 外國法人ニシテ所得稅法ヲ施行セサル地ニ本店ヲ有スル者

(タ) 外國法人ニシテ外國ニ本店ヲ有スル者

第二款 課稅標準

所得稅ハ各人ノ所得ニ應シテ國家必要ノ歳入ヲ分擔セシムルノ趣旨ニ出テタル租稅ナルヲ以テ其課稅標準ハ各人ノ所得ニ在ルコト當ヲ須タル所ナリ而シテ所得稅法ノ使用スル所得ナル用語ハ總所得ヲ謂フニアラスシテ純所得ヲ謂フモノナルコトハ同法カ總所得ナル義ヲ現ハサントスル場合ニ於テハ常ニ收入ナル語ヲ用キ之ヲ所得ニ區別シタルヲ以テ明カナリ

課稅標準タル所得ニ付テハ其種類、計算、確定、更訂ノ四段ニ分テ稅法ノ適用ヲ明

ニセントス 第一種所得ノ種類 各人ハ簡人タルト法人タルトヲ問ハス第一款ニ述ヘタル條件ヲ具備スルトキハ所得稅ヲ納メサルヘカラサルモノナリト雖モ其所得ハ悉ク課稅ノ標準ト爲ルモノニアラス所得中ニハ法律カ定メテ以テ所得稅ヲ課スヘカラスト爲ス所ノモノアリ故ニ所得ノ種類ハ大別スレハ先ツ所得稅ヲ課スヘキ所得及ヒ所得稅ヲ課スヘカラサル所得ノ二ト爲ルヘシ

甲 所得稅ヲ課スヘキ所得

所得ハ之ニ課稅スルヲ原則トスルヲ以テ法律カ特ニ定メテ所得稅ヲ課セスト爲スモノノ外ハ皆所得稅ヲ課スヘキ所得ナリト謂ハサルヘカラス法律ニ於テ所得稅ヲ課セスト規定シタル所得ハ後ニ之ヲ述フヘキカ故ニ茲ニハ姑ク所得稅ヲ課スヘキ所得ハ所得稅ヲ課スヘカラサル所得以外ノ所得ナリトノ消極的說明ニ止メテ其以上ニ及ハサルヘシ 法律ハ所得稅ヲ課スヘキ所得ヲ分チテ左ノ三種ト爲セリ(所得稅法第三條)

第一種 法人ノ所得

第二種 所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ爲ス公債社債ノ利子

第三種 前各種ニ屬セサル所得

所得ヲ三種ニ分チタルハ所得ノ種類ニ依リ所得稅ノ稅率又ハ徵收ノ方法若クハ時期ヲ同シウセサルヲ以テナリ稅率及ヒ徵收方法又ハ時期ハ後款ニ說明スヘキカ故ニ之ヲ省略シ茲ニハ唯前記各種類ノ所得ノ分界ヲ明ニスルカ爲メ一二言ヲ費サントス 第一種ノ所得ハ廣ク法人ノ所得ト定メタルカ故ニ所得ヲ得タル主格ニシテ法人ナルトキハ其所得ノ種類如何ヲ問ハス總テ之ヲ第一種ノ所得ナリト爲ササルヘカラス 第二種ノ所得ハ所得ノ種類ニ依リテ之ヲ定メタルヲ以テ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ爲ス公債社債ノ利子ハ其權利者カ簡人タルト將タ法人タルトヲ問ハス共ニ之ヲ第二種ノ所得ト爲スヘキモノナリ法律ハ廣ク公債社債ノ利子ト規定シタルヲ以テ帝國ノ國債地方債又ハ帝國法人ノ社債ハ勿論外國ノ國債地方

債又ハ外國法人ノ社債ト雖モ苟モ所得稅法施行地ニ於テ其利子ヲ支拂フトキハ其利子ハ之ヲ第二種ノ所得ト爲ササルヘカラス但シ茲ニ所謂公債社債トハ公ニ募集シタル公債社債ノミヲ謂フモノニシテ公ニ募集セサル借入金ノ如キハ之ヲ含ムモノニアラス所得稅法施行規則第三十四條カ第二種ノ所得ニ付キ所得稅ヲ徵收ヲ爲ス場合ノ規定ヲ爲シ公ニ募集シタル公債社債ナル文字ヲ使用シタルハ此意思ヲ明ニシタルモノト謂ハサルヘカラス

第三種ノ所得ハ第一種及ヒ第二種ニ屬セサル所得ナリトス第一種ノ所得ハ法人ノ所得全體ヲ包含スルヲ以テ之ヲ除ケハ殘ル所ハ唯箇人ノ所得アルノミ而シテ更ニ第二種ノ所得モ亦之ヲ除外セサルヘカラサルカ故ニ他語ヲ以テ之ヲ言ヘハ第三種ノ所得ナルモノハ箇人ノ所得中所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債社債ノ利子ヲ除キタルモノナリト謂フヘシ

乙 所得稅ヲ課スヘカラサル所得

法律カ所得稅ヲ課スヘカラスト爲ス所得ハ左ノ如シ所得稅法第五條

(イ) 軍人從軍中ニ係ル俸給 從軍トハ開戰アル場合ニ於テ軍務ニ從事スルヲ

云フ故ニ戰爭アルニアラザレハ從軍ナルコトヲ生セス隨テ現今臺灣ノ守備ヲ爲スカ如キハ之ヲ從軍ト謂フコトヲ得ス然レトモ事實戰アル以上ハ之ニ從事スル者ハ直チニ之ヲ從軍者ト謂フコトヲ得ヘシ必スシモ開戰ノ布告アリテ始メテ從軍者ト爲ルモノニハアラサルナリ

(ロ) 扶助料及ヒ傷疾疾病者ノ恩給 官吏其他公務ニ從事シタル者ノ遺族扶助料ハ總テ之ニ所得稅ヲ課セス恩給ニ至リテハ總テ所得稅ヲ課セサルニアラス唯傷疾疾病ヲ受ケタルニ因リ受ケタル恩給ノミニ之ヲ課セサルナリ

(ハ) 旅費學資金及ヒ法定扶養料 旅費學資金ハ支出ニ充ツルカ爲メ受クルモノナリト謂フモ可ナルモノナルカ故ニ法律ハ之ニ所得稅ヲ課セス扶養料ナルモノハ扶養ヲ受クヘキ者カ自己ノ資産又ハ勞務ニ依リテ生活ヲ爲スコト能ハサルトキ又ハ自己ノ資産ニ依リテ教育ヲ受クルコト能ハサルトキニ於テ始メテ之ヲ受クルモノナルカ故ニ生活ノ必要費ナリト謂フコトヲ得ヘシ故ニ法律ハ亦之ニ所得稅ヲ課セサルコトト爲シタリ

(ニ) 營利ヲ目的トセサル法人ノ所得 營利ヲ目的トセサル法人ハ公益ヲ增進

スルヲ目的トシテ設立セラレタルモノナルカ故ニ之ニ課税スルトキハ公益事業ノ増進ヲ妨タルヲ結果ヲ見ルナキヲ得ス故ニ法律ハ之ヲ課税ノ範圍外ニ置キタリ予ハ此規定ノ趣旨ニ於テハ適當ノモノナリト信スト雖モ法文ノ配置ニ於テハ少シク其意ヲ得サルモノナキニアラス營利ヲ目的トセサル法人ノ所得ニ所得稅ヲ課セスト謂フハ所得ヲ取得シタル者カ營利ヲ目的トセサル法人ナルカ故ニ之ニ課税セサルナリ即チ此場合ニ於テハ所得ノ種類如何ヲ問フテ課否ヲ定ムルニアラスシテ其主格ノ何人ナルヤ見テ之カ課否ヲ定ムルモノナリ故ニ予ハ之ヲ第五條列記事項ノ一ト爲サスシテ寧ろ之ヲ第一條ノ例外規定ト爲スヲ相當ナリト信ス

營利ヲ目的トセサル法人ノ所得ハ其種類ノ如何ヲ問ハス總テ之ニ所得稅ヲ課セサルモノナルコト右ニ述フル所ノ如クナルカ故ニ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲ爲ス公債社債ノ利子ト雖モ其公債社債ニシテ營利ヲ目的トセサル法人ニ屬スルトキハ之ニ對シテ所得稅ヲ課スヘカラス公債證券又ハ社債券ニシテ記名ナルトキハ一見シテ其營利ヲ目的トセサル法人ニ屬スルコトヲ知ルヘキヲ

所

場合ニ在リテハ其旨及ヒ離婚ヲ爲シタル者ノ本籍地、族稱氏名其者ト離婚ニ因テ一家ヲ創立シタル者トノ摸柄ヲ記載スル如キヲ附テ復籍拒絕ノ登記前第二編第四章第十六節參照ヲ爲シタルトキハ復籍ヲ拒絕シタル者ノ戸籍ニ其登記ノ要旨ヲ記載スルコトヲ要ス(戸第一八一條)

原家又ハ絶家ノ登記前第二編第四章第十七節參照ヲ爲シタルトキハ最終戸主ノ戸籍ニ其事由ヲ記載シテ其戸籍ノ全部ヲ抹消スルコトヲ要ス(戸第一八二條)而シテ其抹消シタル戸籍ハ戸籍簿ヨリ之ヲ除カサルヘカラス

絶家ノ家族ハ民法第七百六十四條ニ依リ一家ヲ創立スベタ一家ヲ創立シタル者ハ戸籍法第五十三條ニ依リ絶家及ヒ一家創立ノ届出ヲ爲スコトヲ要ス而シテ此届出アルトキハ戸籍吏ハ絶家ノ登記ヲ爲メカ故ニ絶家ニ家族アル場合ニ於テハ前項ニ掲ケタル手續ニ從ヒ最終戸主ノ戸籍ヲ抹消スベキモノトス之ニ反シテ單身戸主家ニ戸主ノミニシテ家族ナキトキテ謂フア死亡又ハ失踪ニ因ル絶家ノ場合ニ在リテハ家族ナキカ故ニ絶家及ヒ一家創立ノ届出ヲ爲スベキ者ナク隨テ前項ニ依リ最終戸主ノ戸籍ヲ抹消スルニ由ナシ故ニ戸籍法ハ第

百八十三條ニ特別ノ規定ヲ設ケ單身ノ主ノ死亡又ハ失踪ノ登記ヲ爲シタル場合ニ於テ其家ニ家督相續人ナキコト分明ナルトキハ戸籍吏ハ戸籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ許可ヲ得テ死亡者又ハ失踪者ノ戸籍ニ絶家ノ原因及ヒ絶家ノ年月日ヲ記載シテ其戸籍ヲ抹消スルヲ要スルコトトセリ

(注意) (イ) 家督相續人ナキコト分明ナルトキハ民法第一千五百二條以下ノ手續ヲ終ヘ家督相續人ナキコト確定スルニ至リタルトキヲ謂フ

(ロ) 戸籍吏カ戸籍法第百八十三條ノ規定ニ從ヒ戸籍ヲ抹消スル場合ニ在リテハ絶家ノ身分登記ヲ爲スヘキ限ニ在ラス

(ハ) 戸籍吏カ區裁判所ノ許可ヲ求ムル手續及ヒ區裁判所ノ許可ノ方式ニ付キテハ別段ノ規定ナシ

戸籍吏ノ管轄地内ニ於ケル本籍地變更ノ届出ヲ受理シタルトキ(次ノ第四章參照)事由ヲ戸籍ニ記載シ舊本籍地ニ關スル記載ノミヲ抹消シ新本籍地ヲ記載スルコトヲ要ス(戸第一八四條此場合ニ在リテハ單ニ本籍地ニ變更アルニ止マルカ故ニ戸籍ヲ改製スルコトヲ要セス本籍地ニ關スル記載ノミヲ改正スレハ

足ル

(注意) 本籍地ノ變更トハ甲村乙字ノ某番地ヨリ甲村丙字ノ某番地ニ轉籍シタルトキノ如キヲ謂フ

以上ニ掲ケタル場合ヲ除ク外身分登記ヲ爲シ又ハ戸籍ニ關スル届出ヲ受理シタルトキハ戸籍吏ハ其登記又ハ届出ニ基キ戸籍法第百七十六條ニ掲ケタル事項ヲ戸籍ニ記載スルコトヲ要ス(戸第一八五條第一項)

前項ノ場合ニ於テ戸籍法第百八十條第二項ノ規定ニ依リテ戸籍ニ記載シタル事項ノ變更アルトキハ其變更ヲ記載スルコトヲ要ス同條第二項

(注意) 戸籍法第百八十條第二項ノ規定ニ依リテ戸籍ニ記載シタル事項ノ變更アルトキトハ例ヘハ分家ノ登記ヲ爲シ之ニ基キ分家ヲ爲シタル者ノ戸籍ヲ編製シ其戸籍ニ戸籍法第百八十條第二項ニ依リ本家ノ主ノ本籍地族稱

氏名ヲ記載シタル場合ニ於テ其基本タル分家ノ身分登記中本家ノ主ノ氏名又ハ族稱ニ錯誤アリテ身分登記變更ノ登記ヲ爲シタルトキノ如シ此場合ニ在リテハ其身分登記變更ノ登記ニ基キ分家ヲ爲シタル者ノ戸籍ニ於ケル

記載中本家ノ戸主ノ氏名又ハ族稱ヲ訂正セラルベカラズ
戸籍法第七十九條及ヒ第八十條ノ規定ニ依リテ戸籍ヲ編製シタルハ
戸籍吏ハ遲滞ナク其戸籍ノ副本ヲ監督區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ニ送付
スルコトヲ要ス(戸第一九四條)

(注意) (1) 前第二章ニ説明シタル如ク監督區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所

ハ戸籍簿ノ副本ヲ保存スヘキモノナルカ故ナリ(戸第一七二條)

(2) 婚姻死亡轉籍其他ノ事由ニ因リテ戸籍ニ記入ヲ爲シ又ハ戸籍ノ全部若
クハ一部ヲ抹消シタルトキハ其加除ヲ爲シタル旨ヲ監督區裁判所ヲ管轄ス
ル地方裁判所ニ報告スルコトヲ要セス蓋シ別段ノ規定ナキカ故ナリ

第四章 戸籍ニ關スル届出

第一節 通則

(三) 緒言 既に前章ニ於テ説明シタル如ク戸籍吏ハ身分登記ヲ爲シタルトキ
戸籍ニ關スル届出ヲ受理シタルトキ又ハ戸籍法第八十三條ノ場合ニ於テ戸

籍ノ記載ヲ爲スコトヲ要スルモノトス

戸籍ニ關スル届出トハ身分登記ニ關係ナクシテ戸籍ニミ關係アル届出ヲ謂
フ出生其他前編第四章ニ説明シタル届出ハ身分ニ關スル届出ニシテ戸籍吏之
ニ因リテ身分登記ヲ爲シ然ル後其登記ニ基キ戸籍ノ記載ヲ爲スヘキモノタリ
之ニ反シテ戸籍ニ關スル届出ハ戸籍吏之ニ基キ戸籍ノ記載ヲ爲セハ足ルモノ
ニシテ身分登記簿ニ其事項ヲ登記スヘキ限ニ在ラス

戸籍ニ關スル届出ニ三種アリ轉籍ノ届出就籍ノ届出及ヒ除籍ノ届出是ナリ次
ノ(三)ニ於テ此三種ノ届出ニ通スル手續ヲ説明シ第二節及ヒ第三節ニ至リ各種
ノ届出ニ關スル特別ノ手續ヲ説明スヘシ

(三) 通則 戸籍ニ關スル届出ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス但正當ノ事由

アルトキハ届出人ハ戸籍吏ニ其理由ヲ陳述シ口頭ニテ届出ヲ爲スコトヲ妨ケ

ス(戸第二百二條ニ依リ戸第四十三條準用)
戸籍ニ關スル届書ニハ左ノ事項ヲ記載シ届出人之署名捺印スルコトヲ要ス
(戸第二百二條ニ依リ戸第四十四條準用)

一 届出事件
二 届出ノ年月日
三 届出人ノ族稱職業出生ノ年月日及ヒ本籍地
法定期間内ニ届出ヲ爲スル場合就籍又ハ除籍ノ届出ニ於テ届出ヲ爲ス
ヘキ者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ親權ヲ行フ者又ハ後見人ヲ以テ届
出義務者トス而シテ其届書ニハ左ノ事項ヲモ記載スルコトヲ要スルモノトス
戸第二百二條ニ依リテ戸第四十六條第二項準用
一 届出ヲ爲スヘキ未成年者又ハ禁治産者ノ氏名族稱出生ノ年月日及ヒ本
籍地
二 届出ヲ爲スヘキ者ノ無能力ノ原因
三 届出人カ親權ヲ行フ者又ハ後見人タルコト
届出人又ハ届出事件ノ本人カ本籍地外ニ在ルトキハ届書ニ其所在地ヲモ記載
スルコトヲ要ス戸第二百二條ニ依リテ第四十九條準用
届書ニ記載スルコトヲ要スル事項中其事實ノ存セサルモノ又ハ知レサルモノ

アルトキハ其旨ヲ記載スルコトヲ要ス但戸籍吏ハ各届出事件ニ付キ特ニ重要
ト認ムル事項ヲ記載セサル届書ヲ受理スルコトヲ得ス戸第二百二條ニ依リ戸
第五十條準用
届書ニハ戸籍法其他ノ法令ニ定メタル事項ニアラザレハ之ヲ記載スルコトヲ
得ス戸第二百二條ニ依リ戸第五十一條準用
届書ニハ略字又ハ符號ヲ用ヒス字畫明瞭ナルコトヲ要シ年月日時及ヒ年齢ヲ
記スル數字ニハ一二三十ノ字ヲ用ヒスシテ壹貳叁拾ノ字ヲ用フルコトヲ要ス
次ニ届書ノ文字ハ之ヲ改竄スルコトヲ得ス若シ訂正挿入若クハ削除ヲ爲シタ
ルトキハ其字數ヲ欄外ニ記載シ又ハ文字ノ前後ニ括弧ヲ附シ届出人ノニ認印
シ其削除ニ係ル文字ハ尙ホ明カニ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存スルコトヲ要ス戸第
二百二條ニ依リ戸第五十二條第二十九條準用
届書ニハ届出人ノ署名捺印ヲ要スト雖モ其者カ印ヲ有セザルトキハ署名スル
ヲ以テ足り署名スルコト能ハサルトキハ名ヲ代署セシメ捺印スルヲ以テ足ル
若シ署名スルコト能ハス且ツ印ヲ有セザルトキハ名ヲ代署セシメ捺印スルヲ

以テ是レ但捺印セズ又ハ各テ代署セシメ若クハ捺印シタル場合ニ於テハ届書ニ其事由ヲ附記スルコトヲ要ス(戸第二一八條) 戸籍吏ハ届出人ハ戸籍吏ノ面前ニ出頭シ其届出事件ヲ陳述シ戸籍吏ハ直ニ其口述並ニ届出ノ年月日届出人ノ氏名出生ノ年月日職業及ビ本籍地ヲ筆記シ之ヲ届出人ニ讀聞カセ且チ届出人ヲシテ之ニ署名捺印セシムルコトヲ要ス但届出人ガ疾病其他ノ事故ニ因リ自ラ戸籍吏ノ面前ニ出頭スルコト能ハザルトキハ代理人ヲ差出スコトヲ得(戸第二百二條ニ依リ戸第五十四條第五十八條準用此場合ニ於テ戸籍吏ガ作ルベキ書面ニハ届書ニ關スル規定ヲ準用ス(戸第二百二條ニ依リ戸第五十五條準用) 戸籍法上ノ義務トシテ爲スベキ届出ニハ戸籍法ニ其届出期間ノ定アリ(就緒又ハ除籍ノ届出是ナリ)而シテ其期間ハ裁判確定ノ日ヨリ之ヲ起算ス但届出義務者ガ裁判ノ遂達又ハ交付ヲ受クル前裁判カ確定シタルトキハ其遂達又ハ交付ヲ受タタル日ヨリ之ヲ起算ス(戸第二百二條ニ依リ戸第六十二條準用)尚ホ此場合ニ付キテハ戸籍法第二百二條ニ依リ第六十三條乃至第六十五條ヲ準用ス

キモノトス 何レノ場合タルヲ問ハス戸籍吏カ戸籍ニ關スル届出ヲ受理シタルトキハ届出人ハ手数料ヲ納付シテ届出受理ノ證明書ヲ請求スルコトヲ得(戸第二百二條ニ依リ戸第六十六條準用) 戸籍吏カ戸籍ニ關スル届出ヲ受理セザルトキハ其不受理ノ處分ニ對シ其戸籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得(戸第二〇三條)尚ホ抗告ニ關シテハ前第一編第三章ヲ參照スヘシ 戸籍ニ關スル届書ハ身分登記ニ關スルモノニアラサルカ依ニ此等ノ書類ニ付キテハ戸籍法第三十八條ノ手續ヲ爲スヘキ限ニ在ラス 戸籍ニ關スル届出

第二節 轉籍ニ關スル届出

(三)總論 戸籍法ニ轉籍ト謂フハ婚姻、養子縁組、離籍其他ノ事由ニ因リ一ノ家ヲ去リテ他ノ家ニ入リタル爲メ本籍ニ變更ヲ生シタル場合ヲ指スニアラス其屬スル家ニ變更ナク單ニ本籍ヲ甲地ヨリ乙地ニ轉スル場合ノミヲ指ス例ヘハ

神奈川縣横濱市某町某番地ニ本籍ヲ有スル者カ本籍ヲ東京市麹町區某町某番地ニ移ストキノ如キ是ナリ
家族ハ其戸主ト本籍地ヲ同シウスヘキモノナリ故ニ戸主ハ轉籍ヲ爲スヲ得レトモ家族ハ轉籍ヲ爲スコトヲ得ス而シテ戸主カ轉籍ヲ爲シタルトキハ家族ノ本籍ハ當然之ニ從フ

戸主ニアラサレハ轉籍ヲ爲スコトヲ得ス隨テ戸主ニ限リ轉籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ルモノトス然レトモ戸主カ不在者ナルトキ幼者ナルトキ等戸主權ヲ行フコト能ハサル爲メ親族會親權ヲ行フ者又ハ後見人カ民法第七百五十一條第八百九十五條第九百三十四條ノ規定ニ依リテ戸主權ヲ行フ場合ニ在リテハ其戸主權ヲ行フ者ヨリ轉籍ノ届出ヲ爲スコトヲ妨ケス
轉籍ノ届出ハ之ヲ爲スヘキ戸籍法上ノ義務アルニアラサルカ故ニ固ヨリ届出期間ノ定メナシ
轉籍ノ届出ノ手續ハ戸籍吏ノ管轄地外ニ本籍ヲ轉セントスル場合ト戸籍吏ノ管轄地内ニ於テ本籍地ヲ變更セントスル場合トニ付キ異ナル

(三)手續 戸籍吏ノ管轄地外ニ本籍ヲ轉セント欲スルトキハ戸主ヨリ左ノ諸件ヲ具シ戸籍ノ謄本ヲ添ヘテ之ヲ轉籍地ノ戸籍吏ニ届出ヲルコトヲ要ス

一 轉籍者ノ氏名出生ノ年月日及ヒ職業

二 原籍地及ヒ轉籍地 甲地ヨリ乙地ニ本籍ヲ轉セントスル場合ニ在リテハ甲地ヲ原籍地ト謂ヒ乙地ヲ轉籍地ト謂フ

前項ノ届書ハ正副二本ヲ作ルコトヲ要ス(以上戸第一九五條)

(注意) 正本ノ外副本一通ヲ作ラシムルハ轉籍地ノ戸籍吏即チ新管轄ノ戸籍吏ヨリ原籍地ノ戸籍吏即チ舊管轄ノ戸籍吏ニ之ヲ送付スルコトヲ要スルカ故ナリ尙ホ戸籍ノ記載手續等ニ付キテハ前第三章ヲ參照スヘシ
同一戸籍吏ノ管轄地内ニ於テ甲地ヨリ乙地ニ本籍ヲ轉セント欲スルトキハ戸主ヨリ原籍地及ヒ新本籍地ヲ具シテ其旨ヲ其戸籍吏ニ届出ヲルコトヲ要ス(戸第一九六條)

(注意) (イ) 戸籍ノ記載手續ニ付キテハ前第三章ヲ參照スヘシ

(ロ) 戸籍法ニ於テハ此届出ヲ本籍地變更ノ届出ト謂フ

第三節 就籍及ヒ除籍ニ關スル届出

(四)

本節ニ於テハ就籍ノ届出及ヒ除籍ノ届出ノ手續ヲ説明スヘシ

就籍ノ届出ハ届出ノ闕漏其他ノ事由ニ因リ本籍ヲ有セサル者ノ本籍ヲ定メシトスル場合ニ於テ之ヲ爲スヘキモノトス(戸第一九七條)

(注意)

(イ) 本籍ヲ有セサル原因ニ種種アリ例ヘハ出生ノ届出義務者カ届出

前ニ死亡シタル爲メ出生ノ届出ナク隨テ其身分登記及ヒ戸籍ノ記載ナキト

キ明治五年戸籍編製ノ際記載漏ト爲リタルニ拘ラス其後未タ就籍セサルト

キ等ノ如キ是ナリ

(ロ) 戸籍法第九十七條ニ依ルトキハ届出ノ闕漏ニ因リ本籍ヲ有セサル總

テノ場合ニ於テ就籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ルカ如シ然レトモ例ヘハ出生ノ

届出義務者カ出生ノ届出ヲ爲スコトヲ怠リ居ル爲メ子カ本籍ヲ有セサル場

合ニ在リテハ届出義務者ハ出生ノ届出ヲ爲スコトヲ要シ出生ノ届出ニ因リ

其身分登記ヲ爲シ之ニ基キテ戸籍ノ記載ヲ爲スノ外ナシ子ノ出生ノ届出義

務者ナキ爲メ出生ノ届出ヲ爲スコト能ハサルカ如キ場合ニ於テノミ就籍ノ

届出ヲ爲スヲ得ルニ過キス

之ヲ要スルニ届出ノ闕漏ニ因リ本籍ヲ有セサル場合ニ於テ就籍ノ届出ヲ爲

スコトヲ得ルハ戸籍ノ記載ヲ爲ス基本ト爲ルヘキ身分登記ノ届出義務者ノ

死亡其他ノ事由ニ因リ其身分登記ノ届出ヲ爲スコト能ハサルニ至リタル爲

メ本籍ヲ有セサルトキニ限ル

除籍ノ届出ハ届出ノ闕漏其他ノ事由ニ因リ同一人カ複本籍即チ二以上ノ本籍

ヲ有スル場合ニ於テ其一ヲ除カントスルトキ之ヲ爲スヘキモノトス(戸第一九

七條)

(注意) 同一人カ二以上ノ本籍ヲ有スルニ至ル原因ニ種種アリ例ヘハ婚姻ニ

因リ甲家ヲ去リ乙家ニ入リタル者ニ付キ乙家ノ戸籍ニ其記入ヲ爲シタルニ

拘ラス甲家ノ戸籍中其者ニ關スル部分ヲ抹消セサリシトキノ如シ

除籍ノ手續ヲ爲ス場合ニ種種アリ例ヘハ離婚養子縁組離籍其他ノ事由ニ因

リテ或人カ甲家ヲ去リタル爲メ甲家ノ戸籍中其者ニ關スル部分ヲ抹消スヘ

キトキノ如キ是ナリ然レトモ此等ノ場合ニ在リテハ離婚其他ノ身分ニ關スル届出ニ因リ其登記ヲ爲シ之ニ基キテ除籍ノ手續ヲ爲スヘキモノニシテ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ル場合ニ屬セス除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ルハ同一人カ復本籍ヲ有スルトキニ限ル

就籍及ヒ除籍ノ届出ハ法定期間内ニ戸籍法上ノ義務トシテ爲スコトヲ要スル届出ナリ(戸第一九八條、第一九九條、第二〇一條)

嘗テ本籍ヲ有シタル戸主カ戸籍簿ノ滅失其他ノ事由ニ因リ本籍ヲ有セサルニ至リタル場合ニ於テ就籍ノ届出ヲ爲サントスルトキハ前本籍地ニ異ナリタル地ヲ本籍地ト定ムルコトヲ妨ケス次ニ家族カ就籍セントスル場合ニ在リテハ家族ノ本籍地ハ戸主ノ本籍地ニ從フヘキモノナルカ故ニ戸主ノ本籍地ニ異ナリタル地ヲ本籍地ト定ムルニ由ナシ

復本籍ノ場合ニ於テ其屬スル家ニ一ノ本籍ヲ有シ其現ニ屬セサル家ニ他ノ本籍ヲ有スルトキハ其屬スル家ニ於ケル本籍ハ真正ノ本籍ナルカ故ニ之ニ付キ除籍ノ届出ヲ爲スニ由ナク其現ニ屬セサル家ニ於ケル本籍ニ付キテノ除籍

ノ届出ヲ爲スコトヲ得故ニ例ヘハ婚姻ニ因リテ甲家ヨリ乙家ニ入リタル者カ甲家ト乙家トニ本籍ヲ有スルトキハ甲家ニ於ケル本籍ニ付キ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得レトモ乙家ニ於ケル本籍ニ付キテハ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ス

現ニ屬スル家ニ付キテハ戸籍アル場合ニ在リテハ其真正ノ本籍地ニ於ケル本籍ニ付キテハ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ス故ニ例ヘハ轉籍ノ届出アリタル場合ニ於テ轉籍地ノ戸籍吏カ戸籍ヲ編製シタルニ拘ラス原籍地ノ戸籍吏カ戸籍ヲ抹消スルコトヲ怠リタル爲メ二ノ本籍アルニ至リタルトキハ轉籍地ノ本籍ニ付キテハ除籍ノ届出ヲ爲スニ由ナク原籍地ノ本籍ニ付キテノ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得

就籍及ヒ除籍ノ届出ニハ區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スコトヲ要スル場合ト確定判決ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要スル場合トノ別アリ

(四)區裁判所ノ許可ヲ得テ届出ヲ爲ス場合ノ手續 就籍又ハ除籍スヘキ者カ戸主ナルトキ家族ナルトキ又ハ戸主及ヒ家族ナルトキハ戸主ハ就籍又ハ除籍ノ届出ヲ爲サントスル戸籍役場ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ許可ヲ得テ其

届出ヲ爲スコトヲ要ス(戸第一九七條第二〇〇條)

(注意) 區裁判所ノ許可ヲ得テ就籍又ハ除籍ノ届出ヲ爲スコトヲ得ル者ハ戶

主ニ限ル家族ノミカ就籍又ハ除籍セントスルトキト雖モ家族ヨリ其届出ヲ

爲スコトヲ得ス

就籍ノ届出ハ就籍スヘキ地ノ戸籍吏ニ之ヲ爲スコトヲ要シ除籍ノ届出ハ除籍

スヘキ地ノ戸籍吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス(戸第一九八條第一九九條)

就籍又ハ除籍ノ届出ハ許可ノ裁判カ確定シタル日ヨリ十日内ニ之ヲ爲スコト

ヲ要ス(同上)故ニ許可アリタルトキハ其届出ヲ爲スヘキ戸籍法上ノ義務ヲ負フ

就籍又ハ除籍ノ届出ニハ許可ノ裁判ノ謄本ヲ添フルコトヲ要ス(同上)

就籍ノ届書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

一 就籍スヘキ者ノ氏名族稱出生ノ年月日時職業及ヒ就籍スヘキ地

二 就籍スヘキ者ノ父母ノ氏名及ヒ其者ト父母トノ續柄又實父母ノミナラ

ズ繼父母養父母又ハ嫡母アルトキハ其記載ヲモ爲スコトヲ要ス

三 本籍ヲ有セタル原因

第二節 特許ノ年限

特許權ニハ年限アリ乃チ終期付權利ナリ蓋シ特許ノ制ハ一面ニ於テハ發明ノ

勢ニ酬イ他ノ一面ニ於テハ之ニ由リテ發明ヲ獎勵シテ社會工藝ノ發達ヲ致シ

又其發明ヲ公示セシメテ藝術ノ進歩ヲ促カシ以テ社會ヲ益セント欲スル趣旨

ニ基クモノナリ故ニ發明ヲ保護スル程度ニシテ宜ヲ得シカ決シテ公益ト反撥

スルモノニ非スト雖若シ其程度ヲ超エタル保護ヲ與フルトキハ特許權ハ發明

ヲ專用スル權利ニシテ又營業自由ノ原則ト相背クモノナルヲ以テ大ニ社會ノ

公益ヲ害スル結果トナルヘシ此ヲ以テ商標ノ專用年限ヲ定メタル立法ハ或ハ

之レアリト雖特許ニ年限ヲ定メタル立法例ハ有ラサルナリ

特許ノ年限ハ十五年トシ原簿登錄ノ日ヨリ之ヲ起算ス第三條抵觸査定(六六頁

以下參照)場合ニ於テ審査ノ結果既ニ與ヘタル特許ヲ取消シ出願ノ發明ニ特

許ヲ與フルトキハ其特許年限ハ前特許登錄ノ日ヨリ起算ス(第二十五條)是レ後

ノ出願者ニ取リテハ甚タ氣ノ毒ナル結果トナルモ前ニモ述ヘタル如ク特許年

限ノ規定ハ公衆ノ利益ヲ保護スル爲メ必要ナル制限ナルヲ以テ之ヲ延長スルコトヲ欲セサルニ由ルナリ蓋シ一般公衆ヨリ觀ルトキハ同一發明ニシテ已ニ其以前ヨリ特許ヲ受ケ居ルヲ以テ若シ後ノ出願ニ對シテ同シク十五年ノ特許ヲ與フルトキハ十五年以上ノ專用權ノ存在ヲ見ルコトナルナリ且夫レ後ノ出願者ハ早ク發明シタルニ拘ハラズ最先ノ出願ヲ爲サザリシハ自己ノ過失ト云ハサルヘカラス故ニ年限ノ損失アルハ自業自得ナルノミナラス之ニ對シテ一定ノ損失ヲ負ハシムルハ特許ヲ可成の早ク出願セシムル爲メ必要ナル立法ナリトス

第三節 特許權ノ處分

一 特許權ハ財産權ナリ故ニ之ヲ處分スルコトヲ得セシム特許法第四條ハ之ヲ明言セリ
特許ハ制限ヲ付シ若ハ付セスシテ讓渡シ其有ト爲シ又ハ質權ノ目的ト爲スコトヲ得

乃チ特許ハ之ヲ讓渡シ其有ト爲シ又ハ質入レスルコトヲ得特許ノ共有ニ關シテハ民法ノ共有ノ規定ノ準用アリ(民法第二六四條又其質權ニ關シテハ民法ノ權利質ノ規定ノ適用アリ(民法第三六二條))

特許ハ制限ヲ付シテ讓渡スコトヲ得第四條ニ所謂「制限ヲ付シ若ハ付セスシテ」文字ハ讓渡ノ文字ニノミ繫ル文字ナルコト理義明白ナリ
制限トハ特許權ノ範圍ヲ制限スル意味ナリ詳シク言ハハ特許權ノ一部ヲ分割スルノ義ナリ讓渡契約ニ附帶ノ約款又ハ條件ト異ナリ條件又ハ約款ハ契約ト關係スルモノニシテ權利其物ノ實質ト相關スル所ナシ例ヘハ讓渡シタル權利ヲ相續人又ハ第三者ニ移轉スヘカラスト云フ如キハ附帶ノ約款ニシテ所謂「制限ヲ付シタル」特許權ノ讓渡ニ非ス制限ヲ付シタル特許權ノ讓渡トハ特許權ノ内容ノ一部ヲ行使スル權利ヲ他人ニ分與スルヲ謂フ例ヘハ特許發明ニ係ル物品ノ販賣權ノミヲ讓與スルコトアリ又ハ或地區内ニ於ケル發明專用權ヲ分與スル場合アリ是皆ナ所謂「制限付讓渡」ナリ
制限付讓渡トシテ實際ニ行ハルル法律行為ヲ見ルニ

一 土地ニ關スル制限アリ例ヘハ某縣又ハ某地方ニ限リ特許發明ヲ行使スル權利ヲ與フルモノナリ此中ニ二種アリ一ハ其限定セル地區内ニ於テハ讓受人ハ專用權ヲ有シテ讓渡人自身モ其區域内ニ於テ發明ヲ行使スルコトヲ得サルモノナリ二ハ讓渡人ト讓受人ト其區域内ニ於テハ恰モ共有者ノ如ク共ニ發明ヲ行使スルモノナリ

二 時ニ關スル制限アリ何年何月間ト時間ヲ限定シテ發明ヲ行使セシムルナリ是亦自ラ二種アリ一ハ其年限間ニ於テハ特許權自身モ發明ノ行使ヲ爲ササルアリ二ハ特許權者讓受人ト等シク發明ヲ行使スルコトヲ得ルモノナリ

三 内容ニ關スル制限アリ特許權ノ内容タル製造使用又ハ擴布等ノ利用方法ノ内一部ヲ限リ他人ニ行使スルコトヲ得セシムルモノナリ是亦其部分ノ行爲ニ關シテ讓受人ニ專用權アルモノト否トノ區別アルコト前述ノ制限ニ於ケルト等シ

土地時間又ハ内容ノ制限ハ必スシモ別別ニ行ハルモノニ非スシテ多クハ同時ニ數種ノ制限ヲ付シテ讓渡スナリ而シテ最も多ク見ル所ノ制限付讓渡ハ一

定ノ年限間一定ノ地區ヲ限リテ專用權ヲ讓渡ス場合ナリトス

夫レ特許權ハ不可分ナリ共有ノ場合ノ外ハニ特許權ヲ分有スルコト能ハス故ニ制限付讓渡ニ於テハ單ニ發明ノ用法ノ一部即チ一部ノ使用權ヲ讓渡スルノミニシテ特許權其物ハ依然讓渡人ノ手ニ在リ恰モ土地ノ所有者カ地上權又ハ賃借權ヲ設定スルモ其所有權者タルニ於テ變ハル所ナキカ如シ故ニ普通ノ用語ヨリ觀ルトキハ之ヲ特許權ノ讓渡ト謂フハ要カナラサルカ如シト雖我法文ニ所謂ル制限ヲ付シタル特許ノ讓渡ハ此ク解釋セサルヘカラス

此ニ於テ必ス起ルヘキ疑問ハ特許權ノ讓渡ト云フ以上ハ特許權其物ノ移轉無カルヘカラス此ニ説ク所ノ如クハ特許發明ヲ利用スル權利ヲ他人ニ與ヘタルニ過キスシテ所謂ル讓渡人ハ依然特許權者ニシテ所謂ル讓受人ハ終ニ特許證主ト爲ラス特許權ノ讓渡ナルモノ何レニ有ルヤト是ナリ此ノ疑問ハ實ニ當然起ルヘキ疑問ナリ

獨逸特許法第六條ニモ我特許法第四條ト始ト同様ナル規定アリ曰ク特許請求權及特許權ハ制限ヲ付シ若ハ付セスシテ契約又ハ死前ノ處分ニ依リ之ヲ他人

ニ移轉(ユーベルトラージン)スルコトヲ得下此ユーベルトラージンナル語ニ合
マルル讓渡フエルオイセルング中ニハ一定ノ制限内ニ於テ他人ニ發明ヲ使用
スル權利ヲ與フル如キ場合モ所謂ル制限付讓渡トシテ包含セララルコト學者、
實際家ノ等シク認ム所ナリ此ニ參考トシテ少シク獨逸學者カ讓渡フエルオ
イセルングナル語ヲ説明スル所ヲ紹介スヘシ抑モ讓渡ニ承繼的讓渡(トランス
ラチーフエ、フエルオイセルング)アリ設定的讓渡(コンスタチーフエ、フエル
オイセルング)アリ承繼的讓渡ハ權利カ其形ノ儘ニテ移轉スルナリ是通常債權、
物權ノ讓渡トシテ行ハルル所ニシテ讓受人ハ讓渡人ノ權利ヲ其儘繼承スルナ
リ例ヘハ地上權ノ讓渡アレハ讓渡人ハ地上權ヲ失ヒ讓受人ハ之ニ代ハリテ地
上權者トナルナリ設定的讓渡ニ在リテハ之ニ反シテ讓渡ノ目的タル權利ハ勿
論讓渡人ノ有スル權利ニ屬スルモ讓受人ハ之ヲ其形ノ儘ニテ讓受ケスシテ全
ク別種ノ權利ヲ取得スルナリ而シテ讓渡人ノ權利ハ其實質ニ於テハ減殺セラ
ルモ依然從前ノ性狀ヲ有スルナリ例ヘハ土地所有權者カ他人ノ爲メニ地上
權其他ノ物權ヲ設定スル場合ノ如シ所有者ハ依然所有權ヲ有シ讓受人ノ得タ

ル權利ハ所有權ニ非スシテ別種ノ物權ナリ然カモ其實所有權ノ一部ニ外ナラ
ス即チ所有權ノ内容ノ一部ヲ讓渡シタルナリト謂フ也
我民法ニ於テ所有權者カ他人ノ爲メニ地上權其他ノ物權ヲ分與スル行爲ハ之
ヲ設定ト稱シテ讓渡ト云ハス通常ノ用語トシテモ亦此等ノ場合ニ讓渡ナル語
ヲ用キサル例ナリ然レトモ特許法第四條ニ所謂ル讓渡ナル語ハ獨逸語ノ「フエ
ルオイセルング」等シク設定的讓渡モ亦之ヲ包含スル義ト解セサルヘカラザ
ル理由アリ

之ヲ沿革ニ徵スルニ明治十八年ノ專賣特許條例第七條ニハ「專賣ノ權ヲ他人ニ
讓與又ハ分與セントスルトキハ農商務卿ニ願出ツヘシ」トアリ而シテ始メ農商
務省ヨリ提出シタル此條例ノ草案ニハ分與ノ文字ニ註ヲ下シテ「年期若ハ地區
ヲ限リ又ハ其他ノ約束ニ由リ其權利ヲ分チテ專用セシムルヲ謂フ」ト云ヘリ而
シテ此條例ニ依リ特許局ニ於テ分與ト看做シテ取扱ヒタルモノハ共有權又ハ
地區ヲ限リテ發明ノ專用權ヲ與ヘタル行爲ナリキ明治二十一年ノ特許條例第
二十二條ニハ「特許ハ制限ヲ附シ若クハ附セスシテ賣與讓與シ若クハ共有トナ

ル規定ヲ適用スルコトヲ得サルハ勿論ナリト雖當事者ノ意思ニ於テハ或ル地
區ヲ限リテ他人ニ發明ヲ專用セシムルハ單ニ特許ヲ貸與シタル意味ニ非スシ
テ其部分ノ特許ヲ讓渡セルト同様ニ思惟スル事實アリ專賣特許條例ニ於テ之
ヲ分與ト稱セシハ當事者ノ意思ヲ最も好ク言表ハセルヲ覺ユ已ニ然ラハ之ヲ
他ノ單ニ發明ノ使用ヲ許セル場合ト區別スヘキ理由アリ他人ニ發明ヲ使用ス
ルコトヲ許スモ專用權ヲ與ヘサルトキハ當事者ノ意思ハ其部分ノ發明ヲ使用
ヲ其一人ニ獨占セシムルニ非スシテ特許權者自身ハ勿論尙ホ第三者ニモ同様
ノ使用ヲ許スコト有リ得ヘキナリ乃チ特許權ヲ分與セル觀念ニ非スシテ單ニ
使用セシムト謂フニ過キス學者ハ之ヲ許容(Concession)ト稱ス許容ノ場合ニ於テハ
其關係ハ純然タル債權關係ナルヲ以テ制限付讓渡ニ非ス隨テ第三者ニ對抗ス
ルコトヲ得ス然レモ學者ハ其時ニ專賣權ノ性質ヲ失フ事ヲ認ムルハ可キ
特許權カ共有ヲ妨ケサルカ如ク制限付讓渡ニ於テモ亦其有の性質アル專用權
ヲ設定スルコトヲ得ヘシ例ヘハ數多ノ共同讓受人アル場合ノ如シ又讓渡人カ
讓受人ト其制限内ニ於テ同様ニ發明ヲ利用スル場合ニ於テモ第三者ニ發明ノ

使用ヲ許ササル約束アル場合ニ於テハ亦タ制限付讓渡ナリ然レモ學者ハ
制限付特許權ノ讓受人ハ自ラ特許證主ニ非スト雖特許發明ヲ專用スル權利ヲ
取得シタル者ナルヲ以テ其權利ノ範圍内ニ於テ他人カ其發明ヲ使用スルトキ
ハ之ニ對シテ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘク又已ニ被害者タルヲ以テ第
四十八條ノ規定ニ依リ第四十五條ノ犯罪ノ告訴者タルコトヲ得ヘシ讓受人ハ
又特許證主ニ對シテモ損害賠償ノ訴ヲ起スコトヲ得ヘシ然レトモ特許證主ハ
自己ノ特許發明ニ對シテ第四十五條ノ犯罪ヲ犯スコト莫シ
二 讓渡共有及質權ノ設定ハ登錄ヲ爲スニ非サレハ第三者ニ對抗スルコトヲ
得ス(第四條第二項)夫レ普通通ノ特許ノ讓渡共有及質權ノ設定ハ元來法律行為完
成ノ時ヨリ第三者ニ對シテ對抗スルコトヲ得ヘキモノナリ然ルニ第四條第二
項ノ規定アルカ爲メニ登錄ヲ爲ス迄ハ第三者ニ對抗スルコトヲ得サルコトト
ナレルナリ之ニ反シテ制限ヲ付シタル特許權ノ讓渡ハ債權ノ設定ニ過キサ
ルヲ以テ本來第三者ニ對抗スルコトヲ得サルモノナリ故ニ之ニ第四條第二項ヲ
適用スルトキハ若無意味ノモノトナルヘシ然レトモ第四條第二項ノ規定ハ一

而ニ於テハ登録前ニ第三者ニ對抗スルコトヲ許ササルト同時ニ他ノ一面ニ於
テハ登録ニ依リ第三者ニ對抗スルコトヲ得セシムル規定ト見サルヘカラス是
立法ノ趣旨ナリ

三 此ニ許容(Licence)ニ關シテ少シク説述スヘシ許容ナル語ハ他人カ我發明ヲ
利用スルモ認許シテ敢テ之ヲ禁セスト謂フ意ニシテ之ヲ發明行使ノ權利ヲ與
ヘタル場合ト區別スル觀念ヨリ起リタルモノノ如シ乃チ許容ノ場合ニ於テハ
特許權者自身モ同様ニ發明ヲ利用シ得ルハ勿論特許權者ハ更ニ他人ニ同様ノ
許容ヲ隨意ニ與フルコトヲ得ルナリ蓋シ特許ハ積極的ノ權利ニ非スシテ單ニ
他人カ其發明ヲ利用スルヲ禁止スル權利ナリト謂フ舊學説ニ由ルトキハ許容
ハ唯タ發明ヲ利用シ得ルニ止マリ他人ノ其發明ヲ利用スルコトヲ拒ムヘキ權
利ヲ與ヘラレサルヲ以テ特許權ヲ使用スルモノニ非スト謂フナリ然レトモ特
許權ハ他人ノ發明ノ利用ヲ禁止スル權利ニ非スシテ發明ヲ專用スル權利ナリ
換言スレハ發明ノ物品又ハ方法ヲ製造販賣擴布スル權利ナリ而シテ此權利カ
專權ナルカ故ニ他人ハ其發明ヲ利用スルコトヲ得サルノミ然ルニ許容ニヨリ

テ其發明ヲ使用スルコトヲ得ルトスレハ是レ特許發明使用ノ權利ナルコト明
カナリ唯タ純然タル債權の觀念ニ基クモノニシテ所謂制限付讓渡ノ發明其
物ノ上ニ直接ニ行ハルルカ如キ權利ヲ設定セル場合ト區別スヘキ理由ノ存在
ヲ否認スルコト能ハサルノミ

上ニ述ベタル場合ノ外ニ尙ホ許容ノ著シキ例ハ吾人カ特許品ヲ讓受ケタル場
合ニ於テ隨意ニ之ヲ使用シ又ハ之ヲ他ニ讓渡スコトヲ得ル場合ニ在リ吾人カ
日常買受ケタル特許品ヲ自ラ使用シ又ハ他ニ讓渡シタル場合ニハ所謂發明
物品ノ使用又ハ擴布ニシテ特許權ノ侵害タルヘキ行為ニ非スヤ然ルニ通常之
ヲ以テ特許權ノ侵害ト看做ササルモノハ此ニ特許權者ノ默示ノ許容アルカ爲
メナリト謂フナリ解スル者ハ曰ク此場合ニ於テハ特許權者ハ豫メ不特定ノ人
ニ對シテ許容ヲ與ヘタルナリ乃チ我一旦擴布シタル物品ヲ正當ニ取得シタル
者ハ之ヲ使用又ハ讓渡スルコトヲ得ヘシト謂ヘルナリ敢テ其取得者ニ權利ヲ
與ヘタルニ非ス何トナレハ特許權者ト取得者各箇トノ間ニハ一モ權利ノ成立
ニ關スル合意ノ存スルコト無ケレハナリト然レトモ特許權者カ與ヘタル所謂

ル許容ハ一種ノ承諾ト見ルヘカラスヤ此承諾ハ他人カ其物ヲ取得スル際ニ有
スル意思即其物品ヲ使用處分セシトスル意思合致シテ使用處分權利ヲ生
スルモノト見ルヘカラスヤ
許容ノ場合ニ於ケル發明ノ使用權者ハ他人カ其發明ヲ使用シタルニ對シ損害
賠償ヲ請求スルコトヲ得ス何トナレハ許容ハ專用的權利ニ非タルヲ以テ他人
カ其發明ヲ使用スルモ損害ヲ受ケタリト謂フコトヲ得サレハナリ之ニ反シテ
特許證注ハ此ノ發明使用者ニ對シテ損害ノ要償ヲ爲スコトヲ得ヘシ許容ニ由
ル使用權者ハ又自ラ被害者タラサルヲ以テ第四十八條ノ規定ニ依リ第四十五
條ノ犯罪ノ告訴者ト爲ルコトヲ得サルハ勿論ナリ
許容ヲ與フル者ハ獨リ特許權者ニ限ラス所謂制限シタル特許權ノ讓受人モ
亦タ其專用權ノ範圍内ニ於テ許容ヲ與フルコトヲ得ヘシ

第四節 特許權ノ侵害

特許權ノ侵害ニ依リテ損害ヲ受ケタルトキハ特許權者又ハ制限付特許權ノ讓

ニ入ラサルモノナリ如何ニ社會カ進歩シテ新シキ權利ヲ生シ來ルモ別ニ新ナ
ル權利ノ「カタゴリ」ヲ作ル必要ナク隨テ著作權ノ如キモ「ジュス、イン、レム」ニ入
ルヘキコト明カナリ即チ總テノ人ニ對抗シ得ル點ヨリ觀レハ著作權ハ生命權
名譽權所有權等ト同シテ所謂對世權ナリト謂フコトヲ得ヘシ此ノ如ク大陸流
ニ説明スレハ權利ノ一ノ分類ヲ制定スル必要アルモ英國流ニ説明スレハ新シ
キ分類ヲ作出スルノ必要ナク簡單ナル説明ヲ以テ足レリトス要スルニ著作權
ノ性質ニ關シ學者カ種種ノ説明ヲ爲スハ或ハ其標準ヲ一定セタルヨリ生シ來
レルニハ非タルヤヲ疑フ予ハ權利ノ分類ニ付テハ英國流ノ見解ヲ正當ト信ス
ル者ナルカ此見解ニ從ヘハ著作權ハ對世權ナリト斷定シテ誤ナシト信ス但是
ノミニテハ著作權ノ性質ヲ説明シ盡シタルモノト謂フコトヲ得サルカ故ニ更
ニ進ミテ著作權ノ内容ヨリシテ此權利ノ性質ヲ論定スヘシ
次ニ著作權ノ内容ヨリ著作權ノ性質ヲ論定セント欲ス抑モ著作權ハ所有權等
ト等シク吾人ノ資產ヲ組成スル財產權ナルカ將タ其他ノ權利ナルカ此問題ヲ
決定セシムヘ先テ權利ノ内容ヲ研究セタルヘカラス而シテ權利ノ内容ヲ研究

スルニハ諸國ノ法制ニ就キテ其規定ヲ見サルヘカラス今歐洲諸國ニ於ケル著作權法ヲ覽ルニ多クノ立法例ニ於テハ著作權ハ著作カ著作物ヲ複製スル專權ナリト規定セリ即チ獨逸國著作權法千九百二年六月一日改正第十一條ニハ「著作ハ著作物ヲ複製シ且營業的ニ之ヲ頒布スルノ權利ヲ專有ストアリ又白耳義國著作權法千八百八十六年三月二十二日第一條ニハ「學藝美術ノ著作物ノ著作ハ其方法形態ノ如何ヲ問ハス其著作物ヲ複製シ又ハ複製セシムルノ權利ヲ有ストアリ又伊太利國著作權法千八百八十二年九月十九日第一條ニハ「精神の著作物ノ著作ハ其著作物ヲ發行シ複製シ及ヒ之ヲ發賣スルノ專權ヲ有ストアリ瑞西國著作權法千八百八十三年一月二十三日第一條ニハ同様ノ規定アリテ「學藝美術ノ所有權ハ學藝美術ノ著作物ノ複製又ハ興行ノ權利ニシテ著作者及ヒ其承繼人ニ屬ストアリ此ノ如ク諸國ノ著作權法ノ規定ヲ覽ルニ著作ノ權利即チ著作權ナルモノハ所有權ノ如ク有體物ノ上ニ行ハレテ物ヲ使用、收益スルノ權利ニ非スシテ著作者カ自己ノ著作物ヲ複製スルノ權利ナリ而シテ所謂複製トハ模製ニ義ニシテ英語ニテ之ヲ reproduces ト云ヒ佛語ニテハ copier

ouirer ト云ハ獨語ニテハ Vervielfältigen ト云フ乃チ著作物ノ複製ト云ヘハ同一ノ形態ヲ以テスルト將タ別種ノ形態ヲ以テスルト又其方法ノ如何ヲ問フコトナク原著著作物ヲ基礎トシテ製作スルノ意ナリ而シテ此複製ノ權利ハ著作者ノ有スル專權ナルカ故ニ著作者ハ一面ニ於テハ其著作物ヲ發行シテ之ヨリ生スル利益ヲ享有スルコトヲ得ヘク又一面ニ於テハ其著作物ノ形態内容ヲ保持シ若クハ之ヲ變更スルコトヲ得ルモノナリ而シテ此二面ノ權利ハ著作者カ他人ヲ排斥シテ獨リ專ラ有スル權利ナルカ故ニ他人カ其著作物ヲ發行シ又ハ其著作物ノ形態内容ヲ變更シタルトキハ之ニ對シテ異議ヲ主張スルコトヲ得ルモノナリ而シテ發行ニ關スル權利ハ金錢上ノ利益ヲ目的トスル權利ナルカ故ニ是レ全ク普通ノ財產權ナリ又著作物ノ形態内容ヲ保持シ又ハ變更スル權利ハ著作物ニ因リテ表ハサレタル著作者ノ思想ヲ維持スル權利ナルカ故ニ一ノ無形の權利ニシテ思想權トモ稱スヘキモノナリ予ハ著作權ハ必ス此兩面ノ性質ヲ有スル權利即チ混成的權利ナリト信ス凡ソ權利ノ性質ヲ論スルニハ必スシモ唯一單純ノ權利トシテ説明スルノ必要ナク權利ノ實質ニ依リテハ種種複雜ナ

權利アルヲ以テ權利ノ性質ヲ論定スルニハ其内容ヲ分析シ諸種ノ實質ヲ有スルモノナルコトヲ發見セハ之ヲ二種以上ノ混成の權利ナリト判定スルモ毫モ差支ナキナリ然レニ著作權ニ關シ從來ノ學者カ單ニ權利ノ一方面ヲ見若クハ一方面ノミニ偏シテ之ヲ説明セントシタルニ由リ正當ノ解釋ヲ與フルコト能ハナリシナラント信ス

著作權ノ一面タル財產權ハ民法ニ設テタル所有權其他ノ財產權ト同一ニシテ吾人ノ資產ノ一部ヲ成シ隨テ相續シ又譲渡スコトヲ得ルコト所有權其他ノ財產權ト毫モ異ナルコトナシ故ニ此點ニ關シテハ茲ニ特ニ論述スルノ必要ナキヲ以テ之ヲ略ス唯他ノ一面ノ權利即チ思想上ノ權利ニ關シテハ茲ニ聊カ説明セサルヘカラス

著作權ノ他ノ一面タル自己ノ思想ヲ保持スル權利ハ他ノ一面ノ權利トハ異ナリ金錢的ノ利益ヲ目的トスルモノニ非スシテ自己ノ思想ヲ他人ヨリ侵害セラルサル權利ナリ抑モ吾人ハ自由ノ思想ヲ有スルカ故ニ如何ナル事ヲモ考ヘ如何ナル工夫ヲモ爲スコトヲ得ヘシ而シテ其思想カ外部ニ表ハレテ一定ノ形

ヲ成スニ至リタル場合ニハ所謂著作物ト爲ルモノナリ蓋シ思想ナルモノハ生命身體等ト同シク吾人ス人トシテ有スルモノナルカ故ニ思想ハ人格ノ一部分ナリト謂フコトヲ得ヘク隨テ著作物ハ人格ノ外部ニ表ハレタルモノト謂フモ取ラ不當ニ非サルナリ果シテ然ラハ他人カ吾人ノ著作物ヲ剽竊シ或ハ之ヲ變更スルハ是レ吾人ノ思想ヲ侵害スルモノニシテ即チ吾人ノ人格ヲ毀損スルモノト謂ハサルヘカラス若シ吾人ノ身體ニ毀損ヲ爲ス者アレハ刑法ハ之ヲ罰シ民法ハ之ヨリ生シタル損害ヲ賠償スヘキコトヲ認ム然ラハ吾人ノ思想ヲ毀損スル者モ亦之ヲ罰シ又ハ之ヨリ生スル損害ヲ救済スルコトノ適當ナルキ固ヨリ明カナリ是レ即チ法律カ著作權ナル權利ヲ創定シテ普通財產上ノ權利ノ外ニ別ニ思想上ノ權利ヲ認ムル所以ナリ故ニ總令財產上ノ利益ニハ何等ノ影響ヲ及ボササル場合ニ於テモ苟モ著作者ノ思想ヲ毀損スルカ如キコトアル場合ニハ法律ハ之ニ保護ヲ與ヘサルヘカラス而シテ此所謂思想上ノ權利ナルモノハ著作者ノ思想ニ基テ權利ナルカ故ニ此權利ハ所謂專屬的權利ニシテ著作者ヲ離レテハ此權利ナキナリ隨テ金錢上ノ權利ハ一般ノ財產ト共ニ相續人ニ移

轉シ又ハ他人ニ讓渡スコトヲ得ルモ此權利ハ他人ニ讓渡スコトヲ得サルモノナリ故ニ著作權ノ讓渡ナルモノハ單ニ金錢上ノ權利ノ讓渡ノミニ止マリ無形ノ權利即チ思想上ノ權利ハ之ヲ包含セサルモノト認メタルヘカラス佛國ノ學者「ダルラス」著作權ハ其全部ヲ讓渡スコトヲ得ス即チ著作物ヲ變更スル權利ハ性質上讓渡スヘカラサルモノナリト曰ヒ白耳義國著作權法ニ於テハ明文ヲ以テ此趣旨ヲ明カニセリ同國著作權法第八條ニ曰ク著作權又ハ著作物ヲ有形ニ表ハシタル物件ノ讓受人ハ著作者又ハ承繼人ノ同意ナクシテ著作物ヲ變更スルコト及ヒ其變更シタル著作物ヲ公衆ノ展覽ニ供スルコトヲ得スト是レ即チ著作權ノ讓渡ナルモノハ著作權ノ財產的方面ノ權利ノミニ止マリテ著作者ノ思想上ノ權利ヲ包含セサルコトヲ明カニセルモノナリ然レトモ此規定ニ依レハ著作者ノ同意ナクモ承繼人ノ同意アレハ之ヲ變更スルコトヲ得ルカ如ク解釋セラル然レトモ是レ理論ヲ貫カサルノ規定ナリ抑モ著作物ハ著作者ノ頭腦ノ果實ナルカ故ニ其產出シタル著作者其人ニ非サレハ其真正ノ意義ヲ知ルコト能ハス隨テ其子孫ト雖モ之ヲ變更スルコトヲ得スト謂ハサルヘカラス何トガ

レハ人ノ思想ハ其人自身ノミ之ヲ識ルコトヲ得ルモノニシテ他人ハ決シテ之ヲ知ルコトヲ得サルモノナレハナリ若シ之ヲ許ストキハ爲メニ先人ノ意想外ノ變更ヲ爲スニ至ルヘク隨テ先人ノ人格ヲ毀損スル結果ヲ生スルニ至ルヘシ故ニ子孫タリト雖モ著作物ノ變更ヲ爲スコトヲ得サルモノトセサルヘカラス我著作權法ハ此點ニ付キ一段ノ進歩ヲ爲シ同法第十八條ニハ「著作權ヲ承繼シタル者ハ著作者ノ同意ナクシテ其ノ著作者ノ氏名稱號ヲ變更シ若ハ其ノ題號ヲ改メ又ハ其ノ著作物ヲ改竄スルコトヲ得スト規定シ著作權ノ讓受人ハ勿論相續人タリト雖モ其先人ノ著作物ニ何等ノ變更ヲ加フルコトヲ得サルコトヲ明カニセリ是レ即チ精神の財產權ノ普通財產權ト異ナル所ニシテ普通財產權ニ於テハ其財產ヲ取得シタル者ハ自己ノ意思ニ隨ヒテ之ニ修繕ヲ加ヘ或ハ増シ或ハ減スルコトヲ得ルモ著作物ニ在リテハ著作シタル人ノ思想ヲ尊重セサルヘカラサルカ故ニ他人ハ勿論子ト雖モ漫ニ先人ノ思想ヲ變更スルコトヲ許ササルナリ蓋シ哲學者ノ子ハ必スシモ哲學者ニ非ス法律家ハ必スシモ明法家ヲ生マス然ルニ若シ子カ自由ニ親ノ著作物ヲ改竄スルコトヲ得ルトセハ或ハ

親ノ意思ニ反スル改竄ヲ爲シ折角親ノ苦心ニ成リタル立派ナル著作物ヲ無意味ニ爲スノ結果ヲ生スルコトナキヲ保セス例ヘハ頼山陽ノ文章ヲ頼三樹カ筆ヲ加ヘシナラハ咸ハ山陽ノ名文ヲ汚セシヤモ知ルヘカラス又マコトレーフ名文ヲ其子孫カ添削セシナラハ吾人ハ「マコトレーフ」名文章ヲ讀ムコト能ハナリシナルヘシ是レ子ト雖モ先人ノ著作物ヲ改竄スルコトヲ得セシメサル所以ナリ換言スレバ著作者ノ思想上ノ權利ハ著作者ニ專屬スルモノニシテ相續シ得ヘカラサルモノナリ佛國ノ「モノヤール」起草シタル著作權法模範草案ニ於テモ此趣旨ヲ明カニシ其草案第九條ニハ「著作者ハ複製ノ權利ヲ讓渡シタル後ト雖モ著作タル資格ヲ拋棄セサル以上ハ偽作者ヲ訴追シ其複製ヲ監督シ自己ノ同意ナクシテ爲シタル總テノ變更ニ對シテ異議ヲ申立ツル權利ヲ有スト」規定シ又著作者ハ著作物ヲ組成スル有體物ヲ讓渡スモ自己ノ同意ナクシテ其著作物ヲ變更シタルトキハ公衆ノ展覽ニ供スルコトニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ト規定セリ即チ此權利ハ生命身體名譽ノ權ト同シク專屬的權利ニシテ讓渡シ得ヘカラサル權利ナルコトヲ認メタルモノナリ故ニ著作權法中ニ著作權

ハ讓渡スルコトヲ得トスルハ單ニ著作權ハ一面タル財產權ノ部分ノミヲ意味スルモノト解釋セサルニ由ラザルモノト信スルハ蓋シテ當然ノ理ナリ又解釋ニ據此ノ如ク著作者ノ權利ヲ分析シテ觀察スルトキハ二種ノ權利ヲ包含スルコトヲ認ムルコトヲ得ヘク隨テ著作權ハ複合的權利ニシテ民法上ノ諸種ノ權利ハ如ク單純ノ性質ヲ有スルモノニ非スト信ス然リト雖モ此二種ノ權利ハ必スシテ常ニ分離スルモノニ非ズシテ互ニ相錯綜セルモノナリ隨テ著作者ノ財產上ノ權利ヲ侵害スルモノハ同時ニ著作者ノ思想上ノ權利ヲ侵害スルモノトアルベク又思想上ノ權利ヲ侵害シテ財產權ヲ侵害セサルコトアルヘク或ハ財產權ヲ侵害シテ思想權ヲ侵害セサルコトアルヘシ例ヘハ甲カ乙ノ著作物ヲ剽竊シテ之ヲ發行スルトキハ財產權ヲ侵害スルコト同時ニ思想權ヲモ侵害スルモノナリ又甲カ單ニ自己ノ說ヲ弘布セシトスルノ目的ヲ以テ書籍ノ發行又ハ講演ヲ爲シタル場合ニ他人カ之ヲ剽竊シタルトキハ思想權ヲ侵害アルモ財產權ヲ侵害セキナリ之ニ反シテ單ニ他人ノ著作物ヲ其儘翻刻シタルニ止マルトキハ財產權ノ侵害アリテ思想權ヲ侵害セキナリ之ヲ要スルニ著作權ハ右ノ二様ノ權利

對具備スルモノナルヲ以テ此二種ノ權利ヲ各別ニ保護スルニ非ズルヲ未ダ究
全ニ著作權ヲ保護スルコト能ハサルナリ然則從來諸國ノ著作權法ヲ覽ルニ
單ニ財產上ノ利益ヲ保護スルモノヲ以テ著作權ヲ保護スル主タル目的ト爲ス
ル如クハ勿レモ漸ク近頃ニ至リテ思想上ノ權利ヲ保護スルモノト著作權ノ保
護ニ缺クヘカラスナルモノナルヲ知ルニ至リ近世諸國ノ著作權ノ立法例ニ
於テハ漸次此主義ヲ採用スルニ至レリ今國ハ甲乙丙ノ三國ニ著者ノ權利ヲ保
我著作權法ニ於テモ右ノ二種ノ權利ヲ保護スル必要ヲ認メ財產上ノ權利ヲ保
護スルハ勿論之下同時ニ思想上ノ權利ヲ保護スル規定ヲ設ケタリ即チ第四十
條ニ於テ著作權ニ非ズル者ハ氏名稱號ヲ附シテ著作物ヲ發賣頒布シタル者ヲ
罰シ又第四十一條ニ於テハ著作權ノ消滅シタル著作物ヲテモ之ヲ改竄シテ著
作者ノ意ヲ害スルコトヲ禁ジ又他人ノ著作物ト詐稱シテ發行スル者ヲ罰スル
規定ヲ設ケタリ此等ノ規定ハ又他人ノ著作物ト詐稱シテ發行スル者ヲ罰スル
此ノ如ク著作權ハ二面ノ權利ヨリ成立スルカ故ニ著作權ノ立法又ハ解釋ニ關
シテ漸次ノ如キ結果ヲ生スルニ至ルヲ今日本國ニ於テ漸次ノ如キ結果ヲ

著作權法ヲ覽ルニ著作權ノ權利ノ侵害ニ對シ單ニ一定ノ罰ヲ以テスルニ過キ
スシテ而モ其罰モ多クハ財產刑ナリ故ニ財產權ノ保護ニシテハ十分ナルモ思
想權ノ保護ニシテハ未ダ足ラサル所アリ又思想權ニ關スル規定ニシテハ適當
ナル所アルモ財產權ニ關スル規定ニシテハ不適當ナルモノアリ例ハ偽作ニ
對シテ單ニ罰金刑ノミヲ科スルハ財產權ノ保護ニシテハ十分ナラスモ思想權
ノ保護ニシテハ未ダ足ラサル所アリ思想權ノ保護ニシテハ更ニ重キ刑ヲ科ス
ル必要アルヘシ又著作權ノ侵害ニ對スル罪ハ多クノ國ノ立法例ニ於テハ申告
罪ト爲シ著作權ノ告訴アルニ非サレハ之ヲ罰セズト爲ス是レ恰モ名譽ニ對ス
ル罪ト同一性質ノモノトシテ申告罪ト爲シタルモノナルヘシ此規定ハ思想權
ニ對シテハ正當ナルモ財產權ニ對シテハ之ヲ申告罪ト爲スノ必要ナカルヘシ
故ニ申告罪ノ規定ハ思想權ニ對シテハ正當ナルモ財產權ニ對シテハ正當ニ非
サルナリ即チ他人ノ著作物ヲ發行シテ其利益ヲ奪フハ猶モ他人ノ財產ヲ奪フ
ト同一ニシテ恰カモ盜罪ト等シキカ故ニ必スシモ申告罪タルモノヲ要ササル
ナリ隨テ此兩様ノ權利ヲ十分保護セントスルニハ著作權中財產權ノ部分ニ對

シテハ刑法ノ財産ニ對スル罪ト同シク之ヲ罰シ思想權ノ部分ニ對シテハ名譽ニ對スル罪ト同一ノ主義ヲ採ルヲ以テ正當ナリトス此ノ如クニ様々方面ヨリ立法スルニ非サレハ著作權ヲ完全ニ保護スルコト能ハズ是レ著作權ナルモノハ單一ノ權利ニ非スシテ混成の權利ナルヨリ生スル結果ナリトシテ其性質ニ非著作權ヲ以テ混成の權利ナリトスル論定ヨリシテ著作權法ノ規定ニ先ツ翻譯權ヨリ結果ヲ生ス即チ翻譯權及ヒ著作權ノ期間ニ關スル規定是ナリ先ツ翻譯權ヨリ説明セシメ著作權ノ中ニ翻譯權ヲ包含スルヤ否ヤハ著作權法上ノ一問題ナリ即チ著作權ナル權利中ニハ著作者カ自己ノ著作物ヲ翻譯スル權利ヲ包含スルヤ將タ翻譯權ハ著作權ト別種ノ權利ナリヤ否ヤ例ヘハ予カ日本文ニシテ書ヲ著ハシタル場合ニ他人ハ隨意ニ其書ヲ佛文又ハ英文等ニ翻譯スルコトヲ得ルヤ將タ外國文ニ翻譯スル權利ハ著作者ノ權利ノ中ニ留保セラルベキモノナリヤ否ヤノ問題ナリ更ニ換言スレハ翻譯權ハ著作權ノ一部ナリヤ否ヤノ問題はナリ此問題モ亦著作權ノ基礎ニ關スル學說ノ異ナルニ依リテ解答ヲ異ニスルナリ著作權ハ普通ニ財産權ノミニ非スシテ思想上ノ權利ヲモ包含スルモノナリ

リトスルノ説ヲ採ルトキハ翻譯權ハ著作權ノ一部ナリト云フコトヲ得ルモ翻譯ナルモノハ同一ノ思想ヲ異種ノ國語ヲ以テ言現スルモノナリ例ヘハ或思想ヲ英語佛語又ハ獨語ヲ以テ記述スルモノ其言辭コソ異ナレ皆同一思想ヲ記述スルニ過キタルヲ以テ翻譯ナル事ハ決シテ新ニ自己ノ思想ヲ言現ハスモノニ非スシテ他人ノ思想ヲ他ノ國語ヲ以テ言現ハスニ過キス佛國ノ或學者ハ面白キ譬喩ヲ爲シテ曰ク「翻譯ハ唯衣服ヲ替フルニ過キスシテ身體其レ自身ハ毫モ異ナルコトナシト」蓋シ著作權ノ目的ハ著作者ノ思想ニシテ著作物ハ其思想ノ外部ニ現ハレタルモノナリトセハ翻譯者ハ決シテ著作者ニ非ス何ナレハ翻譯者ハ自己ノ思想ヲ記述シタルモノニ非スシテ他人ノ言現ハシタル思想ヲ異種ノ文辭ヲ以テ現ハシタルニ過キサレハナリ故ニ翻譯者ハ著作者ニ非ストノ結果ヲ生ス隨テ翻譯者ハ其翻譯物ニ付キ著作權ヲ有スルモノニ非スト聞サルヘカラス即チ著作權ハ自己ノ思想ヲ外部ニ現ハシタル者ノ有スル權利ナルカ故ニ自己ノ思想ヲ現ハササル翻譯者ハ著作權ヲ有スベキモノニ非スト論決セサルヘカラス是ニ於テ翻譯權ハ著作權ノ一部ナリ著作權ニ附屬スベキモ

ノナリ 翻譯ハリプロダクション一方法ニ過キストノ論決シ生ズルナリ
然ルニ此點ニ關スル外國ノ立法例ヲ見ルニ前述ノ論據ヲ完全ニ認ムル國ナシ
例ヘハ丁扶露西亞等ノ著作權法ニ在リテハ翻譯權ハ著作權中ニ包含セシメテ
全ク別種ノ權利トセリ故ニ露國ニ於テハ露語ニテ記述シタル書ヲ他人ノ隨意
ニ英獨等他國ノ語ニ翻譯スルコトヲ得ヘク而シテ此等ノ翻譯者モ亦一ノ著作
權ヲ有スルモノトス之ニ反シテ翻譯權ヲ著作權ノ一部トセル立法例ハ北米合
衆國伊太利瑞西ノ著作權法ノ如キ是ナリ但此等ノ國ニ於テハ著作權ハ翻譯權
ヲ有スルモ原著物ヲ出版シタル日ヨリ五年ヲ經過スレハ翻譯權ヲ失ヒ爾後
何人モ隨意ニ翻譯ヲ爲スコトヲ得ルナリ故ニ此等ノ立法例ニ於テハ完全ニ翻
譯權ヲ認ムルモノト謂フコトヲ得ス然ルニ唯リ完全ニ翻譯權ヲ認ム翻譯權ハ
著作權ノ一部ニシテ著作權カ著作權ヲ有スル間ハ翻譯權モ亦著作權ニ屬スト
スル主義ヲ採ルハ佛自獨ノ著作權法ヲミナリトス此等ノ國ニ在リテハ翻譯權
ハ完全ニ著作權ニ屬スルモノト翻譯權ハ著作權ノ一部ニ有ルモノトセリ
此主義ハ著作權ノ性質論ヨリ言ハルハ洵ニ正當ニシテ前ニ述ヘタル如ク著作權

ハ一面ニ於テハ自己ノ思想ヲ維持セル權利ナリ故ニ著作權ノ目的物ハ著作權
ニ思想ナリ而シテ思想ハ外獨ニ現ハルモノハ則チ著作物タルカ故ニ著作
權保護ニ關スル萬國國際同盟會議ニ於テモ翻譯權ハ著作權ノ一部トセザルヘ
カラストノ説ヲ主張スル者アリ夫千八百九十六年巴里ニ於テ開キタル國際同
盟會議ニ於テハ此主義ヲ承認シ其條項ヲ同盟條約ノ一條ニ加フルニ至レリ蓋
シ其理由トスル所ハ翻譯ノ良否ハ原著作者ノ名譽ニ關シ著作物ノ價值ニ關ス
ルモノナリ即チ翻譯ニシテ不完全ニシカ原著作者ノ名譽ヲ傷ケ原著物ノ
價值ヲ失墜スルモノナリ之カ爲メニ原著作者ノ財產上ノ權利ハ害セラルコ
トナシトスルモ原著作者ノ名譽上ニ損害ヲ及ボスニ爭フベカラザルコトナル
カ故ニ著作權中ニ翻譯權ヲ包含セシムルヲ正當トスト云フニ在リ此ノ如ク翻
譯ハ著作權ノ思想ヲ再現(Reproduction)セシメタルモノナリ以テ翻譯權ハ著作權
ノ一部ナリトシ結果ヲ生ズルナリ然レトモ翻譯ハ必スシモ原著作者ノ金錢的
利益ヲ害スルモノ非スシテ場合ニ依リテハ翻譯アリタルカ爲メニ却チ原著
作物ノ販賣高ヲ増シ隨テ其價額ヲ増スコトアリ例ヘハ佛國ノ有名ナル小説家

「ラカバ」(Laba)ト稱スル小説ヲ出版シタルニ各國ニ於テ之ヲ翻譯シ英國ニ於テモ之ヲ英文ニ譯シタル者アリシニ英人ハ喜ビテ此書ヲ讀ミ盛ニ批評ヲ加ヘタルヲ以テ原文「巴里」却テ其販賣高ヲ増加シタリト云フ然ルニ其著者「ラ」余ハ著者ヲ英人カ翻譯シタルカ爲メ余ハ毫モ金銭上ノ損害ヲ受ケザルモ該翻譯ハ原著ノ筆力意思ヲ十分ニ現ハササルヲ以テ余ハ無形上ノ損害ヲ受ケタリト嘆息シタリトノ記事カ佛國ノ新聞紙ニ見エタリ是レ即チ翻譯ナルモノハ必スシモ金銭上ノ利益ニ影響ナキモ思想上ノ損害ヲ與フルモノナルヲ實例トスルニ足ルナリ是ニ由リテ之ヲ觀レバ著作者ノ思想上ノ權利ヲ完全ニ保護スルニハ翻譯權ヲ著作權ノ中ニ包含セシメサルヘカラサルナリ蓋シニ附言スヘキハ我邦カ版權同盟ニ加入シテ以來外國ノ書籍ヲ隨意ニ翻譯スルコト能ハサルニ至レルコト是ナリ是レ我邦ニ取リテハ甚タ不利シナルヲ以テ我邦ノ書籍商組合等ヨリモ政府ニ建議ヲ爲シ翻譯ノ自由ヲ回復センコトヲ要求ス其趣旨ハ我邦カ版權同盟ニ加入シタルハ已ムヲ得サルヘキニ我邦ハ今日歐米ノ文化ヲ輸入セサルニ如クナル時代ナルカ故ニ外國書籍ヲ翻譯

禁セラルルハ最モ我國ノ不利益ナリ元來我國語ト歐洲ノ國語トハ全ク其性質ヲ異ニセルヲ以テ歐米ノ著書ヲ我國語ニ翻譯スルモ爲メニ原書ノ販賣高ニ影響スルカ如キコト殆ト之ナキノミナラス我國語ニ翻譯セラレタルカ爲メ却テ原著書ノ販賣高ヲ増スコトアラン故ニ我國ニ翻譯ノ自由ヲ認ムルモ決シテ原著者ニ損害ヲ及ホスコトナシト云フニ在リ我國ノ政策上ヨリ言ヘハ翻譯ノ自由ヲ回復シ版權同盟條約ニ特例ヲ開クハ我國ニ取リテハ大ニ喜フヘキコトナリト雖モ著作權法ノ理面トシテハ甚タ主張シ難キコトナリ何トナレハ前ニモ述ヘタル如ク著作權ノ保護ハ唯リ財產權上ノ保護ノミニ止マラス著作者ノ思想上ノ權利ノ保護ヲモ包含スヘキモノナレハナリ抑モ學者文學者カ書物ヲ著ハスヤ一章一句ト雖モ苟モセス苦心焦慮ノ結果ニ成ルモノナルニ拙劣ナル翻譯ノ爲メニ原文ノ趣味精神ヲ沒了セラルルニ至ラハ折角ノ名文傑作モ殆ト其價值ナキニ至リ著作者ノ無形上ノ損害決シテ尠少ナラサルナリ故ニ著作權ヲ完全ニ保護センニハ必スヤ著作權中ニ翻譯權ヲ包含セシメサルヘカラス是レ前ニ述ヘタル如ク著作權ニ二方面アリテ其一面ハ則チ思想上ノ權利タルヨ

リ生スル結果ナリ我著作權法ニ於テハ此主義ヲ認メ著作權ノ中ニハ當然翻譯權ヲ包含セルモノトセリ(第一條第二項)
次ニ著作權ノ期間ニ付テ説明セン此點ニ關シテハ諸國ノ法制ニ於テ著作權ノ保護ニ制限ヲ附シ永久無限ニ繼續セルモノト爲ス立法例甚少即チ原著物ノ出版後三十年トカ或ハ著作ノ終身若クハ終身及ヒ死後何年間ト云フ如ク皆一定ノ年限ヲ附スルヲ常トス然ルニ元來權利ナルモノハ特例ナキ以上ハ永久無限ニ繼續スルヲ原則トシ例ヘハ所有權ノ如キモ其目的物ヲ滅失スルカ若クハ所有者カ其權利ヲ拋棄スルニ非サル以上ハ永久ニ存続スルモノナリ著作權ニ於テモ若シ法律ヲ以テ例外ノ規定ヲ設クルニ非サル限ハ相續ニ依リ子孫孫ニ傳ハルヘキモノナリ然ルニ各國ノ法制ニ於テ著作權ニ期限ヲ附シ一定ノ年限ヲ經過セハ著作權ヲ消滅スルモノト爲スハ何故ナリヤ是レ他ナシ若シ著作權ヲ永久のモノトセハ世間一般ノ人ハ其著作物ヨリ生スル利益ヲ收ムルコト能ハサルニ至ルヘケレハナリ即チ若シ著作權ヲ永久のモノトセハ有益ナル著作物ヲ永久一人ノ專有ニ歸セシメ而シテ其人ハ高價ニ非サレハ其

書籍ヲ販賣セサルヲ以テ爲メニ學問ノ進歩ヲ阻礙スルニ至ルヘシ故ニ或一定ノ年限ヲ經過スレハ著作ノ勢力ニ關ユルニ足ルモノト推定シ其年限後ハ自由出版ヲ許シタルモノニシテ畢竟公益上ノ理由ニ基キタルモノナリ我著作權法ハ此點ニ付テモ亦諸國ノ立法例ニ倣ヒテ一定ノ年限ヲ附シ著作ノ生存期間及ヒ其死後三十年間繼續スルモノトセリ(第三條)尤モ期間ノ制限ヲ置カスシテ永久ニ權利ノ存続スルモノト爲セル立法例アリ例ヘハ墨西哥(グエネブエラ)グアテマラノ著作權法ノ如キ是ナリ其他ノ國ニ於テハ皆期間ニ制限ヲ附セリ是レ全ク學問ノ進歩普及ヲ圖ル公益上ノ理由ニ出テタルモノナリ而シテ此期間ニ付テモ亦著作權ノ二様ノ方面ニ依リテ區別セサルヘカラス普通ノ解釋ニ依レハ法定ノ期間例ヘハ著作ノ終身及ヒ死後三十年ヲ經過スレハ著作ノ總テノ權利ハ消滅スルモノトセルモ非ナリ著作權ノ消滅ハ單ニ著作權中ノ財產權ノ部分ノ消滅ニ止マルモノト解セサルヘカラス他ノ一面即チ思想上ノ權利ハ法定ノ期間ヲ經過スルモ仍ホ依然トシテ存続スルモノトセサルヘカラス若シ期間經過後ニ於テ思想上ノ權利モ消滅スルモノトスレハ世間一般ノ者ハ自由ニ

他人ノ著作物ヲ改竄シ剽竊シ又ハ著作ノ名ヲ變ヘテ出版スルモ可ナルコトト爲リ著作ノ權利ハ全ク侵害セラルルニ至ルヘシ例ヘハ山陽ノ文章ヲ後世ノ人カ改竄シ山陽ノ文章ナリトシテ出版シタリトセハ悉クハ山陽ハ地下ニ於テ其暴ヲ嘆スヘシ此ノ如キハ決シテ學者ヲ完全ニ保護スル所以ニ非サルナリ故ニ苟モ學者カ或思想ヲ現ハストキハ其思想ハ之ヲ永久ニ保護セラルヘカラス其學者カ死亡シタル後ニ於テ世人ヲシテ隨意ニ其著作ヲ改竄スルコトヲ得セシメハ是レ營ニ一著作ノ權利ヲ侵害スルノミナラス實ニ學問ノ進歩ヲ妨タルモノト謂フヘシ是ヲ以テ著作權ノ期間ナルモノハ著作權中財產權ニ屬スル部分ニノミ關スルモノニシテ思想上ノ權利ニ關シテハ何等ノ期間ナキモノト解セラルヘカラス果シテ然ラハ著作ノ死亡後ト雖モ其著作物ヲ摸倣シ又ハ改竄スル者アラハ之ニ制裁ヲ加フルノ必要アルヘシ我著作權法ハ此點ニ付キ著作權ノ消滅シタル著作物ト雖モ之ヲ改竄シ剽竊シタル者アルトキハ之ニ制裁ヲ加ヘ以テ思想上ノ權利ヲ保護セリ(第四一條)

此ノ如ク著作權ニ兩面アリトノ解釋ニ據リ著作權ノ保護ニ差異ヲ生ス而シテ

報

○區會ノ違法議決ノ匡正 區會ノ會議ハ町村會ノ例ヲ適用スルモノナルコトハ町村制第百十四條ニ規定セル所ナリ而シテ町村會ノ議決カ越權違法ナル場合ノ匡正方法ハ同制第六十八條第二項第一號ニ明示セル所ナルモ區會ニ付テハ前記ノ法文アルニ過キサルヲ以テ其違法越權ノ場合ニ於テハ復タ如何トモスヘカラサルカ行政裁判所ノ判決要旨ニ曰ク區會ノ議決カ違法越權ナル場合ニ於テ町村制其他ノ法律勅令中町村長ニ行政訴訟ヲ許シタル規定アラサルヲ以テ云云ト(行政裁判所明治三十六年十月二十一日第一四號違法議決)

○稅務屬ノ告發ノ效力 刑事訴訟法第五十三條ニハ何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ云云犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得トアリテ告發ヲ爲スヘキ人ノ何人タルヤハ問フ所ニ非ス然ルニ間接國稅犯則者處分法第十四條ニハ「稅務管理局長ハ犯則事件ノ調査ニ依リ犯則ノ心證ヲ得タルトキハ其ノ理由ヲ明示シ罰金若ハ科料ニ相當

スル金額、沒收品ニ該當スル物品、徵收金ニ相當スル金額及書類送達並差押物件ノ運搬、保管ニ要シタル費用ヲ指定ノ場所ニ納付スヘキ旨ヲ通告スヘシ但シ犯則者ニ通告ノ旨ヲ履行スル資力ナシト認めルトキハ直ニ告發スヘシトアリ又明治三十五年勅令第二百五十五號ニハ間接國稅犯則者處分法ニ依リ稅務管理局長ノ行フヘキ職權ハ稅務署長之ヲ行フアルヲ以テ間接國稅ノ犯則者ニ對スル告發ハ稅務管理局長又ハ稅務署長ニ於テ之ヲ爲スノ義務アルコトハ明白ナルモ之ニ依リテ刑事訴訟法第五十三條ノ規定ヲ制限スルモノナルカハ多少疑義ナキコト能ハス此問題ニ對シ大審院ハ告發ヲ爲スノ權限ヲ有スル者ハ稅務管理局長又ハ稅務署長ニ限ルモノト斷定シテ曰ク「記錄ヲ查スルニ本件ノ告發書ハ松山稅務署收稅官吏稅務署稅務屬小早川事ヨリ奈良地方裁判所檢事正ニ提起シタルモノニ係ル而シテ此告發ハ間接國稅犯則者處分法第十三條但書ノ場合ニ該當スルモノト認めタル事蹟ナキノミナラス松山稅務署長岡元德カ第一審廷ニ於テ證人トシテ陳述ニ被告ハ資力ナキモノト認メ通告ヲ爲スモ履行セサルモノト認メシ故通告ヲ爲サザリシトアルニヨレハ却テ間接國稅

犯則者處分法第十四條但書ノ場合ニ該當スルモノタルコトヲ認ムルニ足ル此場合ニ於テ告發ヲ爲スノ權限ヲ有スル者ハ稅務管理局長若クハ稅務署長ニ限ルコトハ同條及ヒ明治三十五年十月勅令第二百五十五號ノ規定スル所ナルニヨリ稅務管理局長又ハ稅務署長ニ非サル稅務屬小早川事ノ提起シタル前顯告發書ハ無効ナルコト論ヲ待タスト（大審院明治三十六年第一八六〇號酒類及酒類含有飲料稅法違犯事件明治三十六年十月二十日第三）

○總損金ノ意義 法人ノ所得ハ各事業年度ニ於ケル總益金ヨリ同年度總損金前年度繰越金及ヒ保險責任準備金ヲ控除シタルモノニ依ルヲ原則トス「所得稅法第三條第一項第一號第四條第一項第一號所謂總損金トハ如何ナル範圍ノモノヲ指スカ例ヘハ海上運送會社ニ於ケル船舶ノ磨滅減少ヲ填補スル爲メニ積立ツル金額船舶大修繕費其他會社職員ノ手當金ノ如キハ之ヲ損金ノ中ニ入ルヘキモノナルカ行政裁判所ハ總テ之ヲ否定シテ曰ク「本件ノ所爭ハ原告カ明治三十四年事業年度下半年期計算書上記載シタル船舶價却費船舶大修繕費及手當金ナル三費用ノ金額ハ所得稅法第四條第一號中ノ事業年度ノ總損金ト稱ス

ルコトヲ得ルヤ否ニ在リ而シテ同法ノ所謂總損金トハ現ニ支拂ヲ爲シ又ハ動
產不動産ノ價格ノ減損セシモノヲ謂フモノナリ故ニ將來ヲ假定シテ費目ヲ設
クル如キハ豫備ノ方法タルニ過キス隨テ之ニ充當スル金額ハ損金ト看做スヘ
キモノニ非ス然ルニ原告ノ所得金額ニ添付セル明治三十四年事業年度下半期
損益計算書支出列記中ノ手當金ハ俸給又ハ給料ノ如キ會社損益ノ有無ニ拘ラ
ス會社ノ義務トシテ支給スヘキモノト認ムヘキ證書ナキニ由リ却テ會社ニ利
益金アル場合ニ限り給與スヘキモノト認ムヘキモノナレハ利益金ノ處分タル
ニ外ナラサルヲ以テ損金ナリト謂フヲ得ス又船舶ノ修繕ナルモノハ其損傷ノ
大小ヲ豫定シ難キモノナレハ凡テ修繕ヲ要スル時期ニ臨ミ始メテ支出金額ノ
決定スルヲ當然トス故ニ縱令損傷ノ大小ヲ區別シ大修繕費トシテ之カ金額ヲ
表示スルコトアルモ損傷未發ノ場合ニ於テハ豫備金タルニ外ナラサルニ因リ
原告ハ船舶大修繕ノ費目ニ充當スル金額ヲ以テ損金ナリト謂フヲ得ス(行政
所明治三十五年第二百十八號所得金額決定) 官宣告定

○校外生募集廣告

本大學三十七年度講義録ハ之ヲ三學年ニ分チ各學年共十月ヨリ毎月三回發行滿一箇年ヲ以テ
必ス完結セシム○月謝金ハ各學年共金五十錢但官公衙在職者(證明書ヲ要ス)及ヒ本大學校友ノ紹介
アル者ハ金四十五錢トス、總テ入學金ヲ要セス、志望者ハ至急申込ムヘシ

各學年講義録掲載科目及ヒ擔任講師

第一學年

法學通論 中村博士、憲法 清水博士、民法總則第三章マテ 梅博士、同第四章以下 鈴木博士、
物權第六章マテ 藤田博士、債權第一章第三節マテ 梅博士、同第二章第四、五節 中山博士、刑法
總論 谷野博士、國際公法平時 中村博士、同戰時 秋山博士、經濟學 山崎博士

第二學年

債權第二章 梅博士、同第三章以下 田代博士、和法各論 古賀博士、商法總則、會社 松本博士、
商行爲第九章マテ 田坂博士、同第十章 村上博士、民事訴訟法第一編 仁井田博士、同第二編

第三學年

物權第七章以下 富井博士、親族 掛下博士、相續 若槻博士、手形 矢部博士、海商 加藤博士、
行政法總論 美濃部博士、同各論 上杉博士、國際私法 山田博士、民事訴訟法第三編以下第五編
マテ 遠藤博士、同第六編以下、廢棄法 松岡博士

一 月

司法部指定 立 法 政 大 學
文部省認定

法學志林

第五十一號目次 (十二月十五日發行)

- 取立命令ニ就テ 法學士 板倉松太郎
- ラッ、ボダーンノ主權論 法學士 上杉 愷吉
- 最近判例批評 其十五 法學博士 松浦 謙次郎
- 維新以後我國法學趨勢 法學士 加藤 正治
- 露國新刑法 法學大學生 佐竹 三吾
- 違警罪即決處分ト蒙法第二十四條及第五十七條トノ關係 法學士 清水 永澄
- 各債主ハ毎事業年度ニ一定ノ利息ヲ受ケヘシトノ定款ノ效力 法學士 松本 蒸治
- 外國ニ於テ宣告セラレタル債務ノ日本ニ於テハ何効力 講師 山口 弘一
- 金利ノ騰貴ト外國爲替相場トノ關係 法學士 山崎 覺太郎
- 倉庫證券ノ流通ニ就テ 校 友 渡邊武左衛門
- 大審院新判決例 四十四件
- 寄書 司法省指定 私立法政大學
- 其他雜報、記事等
- 發行所 文部省認定

(明治三十六年十月十二日第三編部領 認可)
(每月十四日三十五日八日十二日十五日十八日廿一日廿五日廿八日發行)

明治三十六年十二月卅一日印刷 (定價金貳拾錢)
明治三十七年 一月三日發行

編輯者 東京市牛込區牛込北町十番地 萩 原 敬 之
發行者 東京市牛込區矢來町三番地 小 宮 山 信 好
印刷者 東京市芝區西ノ久保町第十一番地 金子 活 版 所
印刷所 東京市麴町區富士見町六丁目十六番地
發行所 司法省指定 法政大學
(電話番町百七十四番)